グラビア

若い翼によるCMDJコンサート５（１）

開演前に出演者全員と司会者、企画者が写った記念写真

挨拶する戸引理事長
左：司会の佐藤光政氏

①宮木 孝枝（ｿﾌﾟﾗﾉ）伴奏：中野 友裕

②芹沢 妙子（ソプラノ） 伴奏：山木 千絵

③上埜 マユミ（ピアノ）

若い翼によるCMDJコンサート５（２）

④浅井 隆宏（ピアノ）

⑤齋藤 亜里紗（ソプラノ）伴奏：中野 友裕

⑥杉田 聖子（ソプラノ）伴奏：山木 千絵

⑦塩川 翔子（Vn）／宮崎 若菜（ピアノ）

⑧特別演奏：ピアノ連弾：深沢 亮子(primo)／栗栖 麻衣子(second)

第 544 号

音楽の世界

目　次

グラビア　若い翼による CMDJ コンサート５

論壇　終ったもの　始まったもの　助川 敏弥　4

特集　日本音楽舞踊会議の半世紀

本会創立過程についての一証言　高橋 雅光　6
私と日本音楽舞踊会議　八木 宏子　8
僕が音舞会に入会した頃・・・　佐藤 光政　10
音舞会に入会して思うこと　浦　富美　11
会の半世紀とこれから　戸引　小夜子　12
この半世紀と日本音楽舞踊会議　中島 洋一　13

長期連載

音・雑記ーひなの里通信ー (53) ・・・・・・・・・・・・・　狭間 壮　20
名曲喫茶の片隅から (34) ・・・・・・・・・・・・・・・・・　宮本 英世　22
音 盤 奇 譚 (39) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　板倉 重雄　24
私とラジオ・ドラマ (6) ・・・・・・・・・・・・・　助川 敏弥　26

コンサート・レポート　様々な音の風景Ⅸ　西 耕一　28
コンサート・レポート　若い翼による CMDJ コンサート５　湯浅 玲子　30
特別寄稿　ダンスと教育　～心から踊る～　清水フミヒト　33

短期連載

電子楽器レポート・連載（全４回）－１
JSEKM（日本電子キーボード音楽学会）第 8 回全国大会　阿方 俊　36
福島日記(15)　小西 徹郎　38

美術展レポート　″粋美挿画展 2012″に参加して　小西 徹郎　40

コンサート・プログラム　～ピアノと室内楽の夕べ～　42

時評　政治・経済と音楽生活～総選挙を前にして～　日野 啓太郎　47
CMDJ 会と会員の情報　48
新年会のご案内　51

論壇

終ったもの　始まったもの

——50 年を展望する——

作曲　助川　敏弥

創立 50 年。少し前にも回想記を書いたように記憶する。それからまた数年たった。この過去の半世紀をさらに広い視野で展望できるようになった。この会のあり方もまた、歴史の流れの中にあった。会の流れを書くためには世界全体の回顧を書かないわけにはいかない。

この半世紀を振り返り、いま、つくづく思うこととは、「政治の季節の終り」ということである。1960 年代、アメリカがヴェトナムで行き詰まり、資本主義体制がゆきづまり、それに代る新しいものが登場する時が近づいたと本気で実感された。音楽の分野でも、通称「前衛音楽」が最も盛んだったのが 60 年代だった。英語でも「60years Vanguard」という言葉がある。いまでは歴史現象として使われる。日本でも、過激派が勢いを得て、安田講堂事件、浅間山荘事件、よど号ハイジャック事件、が相次いで起こった。しかし、歴史はその方向には進まなかった。ヴェトナム戦争は終り、皮肉なことに 1980 年ソ連がアフガニスタンに侵攻、悪役が交替した。やがてチェルノブイリの原発事故、それにともなうソ連の自称社会主義体制の不備の拡大とその露見。情報の自由がない。言論の自由がない。自由主義を経ない擬態が限界に達した。そして、1990 年ソ連崩壊、それに伴うマルクス主義の退場。まだそうではないなどと、あの時は言っていた人もいたが、あれからすでに 20 年、いまやあきらかに時代は次の段階に進んだ。

あの、1990 年までの世界はなんだったのだろう。冷戦、二つの世界の対立、そして選択。どちらかが正義なら、もう一つはそうでない、という単純にしていま考えればいささか漫画的構図の中に世界は大真面目に生きていた。モーツァルトの「魔笛」の世界である。ザラストロと夜の女王。この会の発足自体が 60 年安保騒動がきっかけであった。あれだけ思想の対立に本気になっていたことは、いまさら感無量である。マルクス主義は最後の宗教であった。そして冷戦は最後の宗教戦争であった。とすれば、いまはじめて中世が終ったのである。

さて、それからまた 20 年が過ぎた。中世が終り「宗教」の対立がなくなった。その結果、無用な敵意が無くなったが、人の世というのは難しいもので、こんどは緊張感が無くなった。白か、黒か、という対立と問題提起が無くなって無方向と無重力の時代になった。どちらかが正しくて、その反対は間違い、ということがなくなった。人はそれぞれが自分の判断で方向を探すほかない。俗語でいえば平和ボケの時代が始まった。

この雑誌「音楽の世界」も、過去の編集内容と読み比べると最近の誌面には「論争」がなくなった。これはこの雑誌だけではなかろう。現状と現実への不満はある。しかし議論がない。社会では最近は「反原発」が一番にぎやかな運動だが、しかし、それは、ただ、現実が部分的にいやだ、というだけの声であり世界観の反対案を提起するものではない。

私たちの専門界、作曲の分野にしても、過去には対立と否定と宣言があった。無調と調性、前衛と伝統、語法の変革、ジョン・ケージの在来のものすべてを否定する活力、それらすべてが消えた。かつて、別宮貞雄さんと「通称前衛」派の激烈な論争。日本最初の電子音楽だった黛敏郎と諸井誠の共作による「七のヴァリェション」をめぐる批判と攻撃、それに対する応戦。本誌でも、日本人の作品推進路線主義とそれに対する批判、これには私も一役かった。

ソ連時代、あの国には社会主義リアリズムというものがあった。ソ連政府が許認する作風である。ショスタコーヴィッチ、プロコフィエフなどの路線、調性による分りやすいものである。これを是とする人たちが日本にもこの会にもいた。おおまじめに政治的要因が音楽の分野にまで侵入していたのである。通称ではあるが、前衛、その他の新しい技法による作風はブルジョア的独善として否定された。そんなことが本気で通用したのである。だから、「政治の季節」といっても音楽の分野もひとごとではなかったのである。反核運動というものがあった。芸術団体であっても、これを熱心にやれという人たちがいた。こうなると、政治が主か、音楽が主か、どちらが本筋なのか分からなくなる。そういう時代が本当に少し前まであったのである。この会にもあった。
社会主義リアリズムとは称さなくても、この政治的路線に同調する人たちはどういうわけか民族主義路線を推奨した。それぞれ信じる道を行くことは一向にかまわないが、この種の人たちはひどく排他的だった。この会に属する以上はこの種の作風、傾向、路線、でなければならないという暗黙の圧力があったのである。いまでは信じられないが。

宗教戦争が終ってその分平和になったが、こんどは平和ボケがやってきた。
社会主義がだめであった以上、資本主義でいくほかない。二つが一つになったのだから選択肢はない。マックス・ウェバーがいうように、資本主義には悪い点が沢山あるが、これしかないのだから仕方ない。悪い所を抑えこみつつやっていくほかない。とはいえ、なかなか難しい。商業利益が推進力になる社会である。これを抑えこむと社会の原動力が低下する。最近はコンクール全盛である。音楽にはいいことのようだが、商品としての音楽の新品開発の動機が潜入していると私には思えるのである。コンクールは能力のきそいあいであるから、質の対立ではない。質ではなく量の競争である。そこには思考の議論はない。

いまから数十年前のこと、私の自宅の選挙区で保守系の新人議員候補者がポスターを張り出した。そのスローガンが「このままでいいのか」だった。この言葉、実はなんにも言っていないのだが、アピールにはなる。おかしな言葉の使い方があるものと感心したものだ。

いま、私たちのこの時代、音楽にも、この会にも、『音楽の世界』誌にも、このスローガンを登場させたくなる。--このままでいいのか--

（すけがわ・としや 本会　代表理事）

特集：日本音楽舞踊会議の半世紀（1）

本会創立過程についての一証言

作曲　高橋 雅光

私が本会に入会した１９７３年は、オイルショックでトイレットペーパーがなくなるという騒動が起きたり、街中ではフォークソングが流行した時代であった。この頃は、本会創立１１年しかたっていないので、創立当初の方々が多く残っていて、いろいろな機会に創立時のことについて話を聞くことがあった。

今回は、本会の創立過程に於けるその方々の話を中心に、また創立当時中心になって活動された方が書かれた、当時の状況についての資料が手元にあるので、その資料を参考に創立当時のことについてもう一度調べ直してみた。

私たちが本会創立当時のことを考えるのには、現在の社会状況・環境と、戦後まもなくの１９５０年代からの経済成長と共に、敗戦の経験と反省、アメリカ主導ではあったが、国民全体が民主化への強い要望を求めていた時代の違いをまず知っておかなければならない。

戦後の民主化とともに文化面では‘５０年代には、音楽の大衆化運動が急速に広がっていった。その担い手となったのが、勤労者音楽鑑賞団体「労音」の発展、“うたごえ運動”の広がりであった。そこに作曲・演奏と音楽家の活動の場も広がっていき、音楽家自身その活動の中で、その専門性を通じ社会との繋がり・同じ人間としての連帯性を発見・認識したのである。それが「民衆・民俗」・「民族性」の再発見にも繋がっていった。

その背景として、経済成長は「特需」「神武」「岩戸」景気として発展していったが、社会状況は、「国鉄＝現在のＪＲ＝国鉄下山総裁殺害事件、三鷹・松川列車転覆事件」等が起き、‘５０年に朝鮮戦争の勃発’５２年には日米行政協定により、日本は米軍に基地を無償提供し、その駐留費用は日米で分担するということから、日本の各地に米軍基地ができたが、一般の人々は朝鮮戦争の関連・民主主義の破壊、また戦火の広がりがあるのではないかという観点から、各地で基地反対闘争が起きるなど社会不安が広がった時代でもあった。

こういう状況の中で、第二次岸信介内閣が‘６０年日米安全保障条約を締結した。このときは、演劇・映画人・音楽・詩人・文学者・舞踊家・画家・歌人（和歌・俳句）・陶芸家等芸術文化に携わる多くの人々も、反対闘争に参加した。この経験が前述の、音楽を通じ同じ人間としての連帯性と共に、民主主義を守るという、多くの音楽家の社会意識を目覚めさせたのである。

このときは、音楽家同士結集してお互い知り会えたことはあったが、このときはそれぞれ別れたので、従って安保闘争が直接本会の結集に繋がったわけではないことは明記しておきたい。

この時代は、専門人の団体組織としては職能的な団体（例えば、Ｎ響等オーケストラ団体）や親睦的体質の団体（例えば、１９３０年４月＝昭和５年に創立した日本新興作曲家連盟＝‘４６年４月に日本現代音楽協会と名称変更や、日本ペンクラブ・日本音楽家クラブ等）しかなかった。

このように音楽家・舞踊家の専門人組織は演劇人組織に比べ遅れていたが、後の政暴法反対運動には、民主主義の危機も叫ばれ、前述の団体も含めて音楽家・舞踊家５３６名９３団体の共同声明が発表された。度重なる不安定な政治状況から、このとき、大衆音楽運動の広がりの中心であった「労音」から、音楽家の結集が呼び掛けられた。音楽家自身も戦前・戦中の苦い経験から、自由な音楽活動を守るという意識が生まれ、音楽家でさえも結集を余儀なくされた。

政暴法反対音楽家、舞踊家の集いは‘６１年１０月４日に東京労音事務局で開かれた。そこで民主主義を守る音楽家・舞踊家の白熱した議論が展開したのである。それは音楽運動懇談会として、話し合いが継続され、それが芸術文化に対する政治・行政の在り方を主張する基点となっていったのである。

法案は運動の盛り上がりの成果もあって継続審議から流れて行ったが、この結集を何とか残したいという意向が、労音側や音楽家・舞踊家の方にもあって、日本音楽舞踊文化会議設立準備世話人会が立ちあげられ、同１１月から翌年‘６２年６月まで１０回の審議、ほかに小委員会３回の審議が根気よくつづけられ、１９６２年６月２７日に日本音楽舞踊会議創立総会が開かれたのである。

本会の“会議”という名称は、音楽運動懇談会のときの経験から、何事も民主的に、全て話し合いにより盛り上げて決めていこうという主旨のもとに、決定した名称である。

最後に本会が結成された時は、戦前から活躍されていた音楽家・舞踊家の人たちと、戦後になって活動を始めた人たちと２世代の共同行動であったこと。つまり、戦前からの音楽家は自らの戦争経験があり、その苦い実体験が内的な動機になって、民主的な自由な音楽活動を標榜したことと、戦後になって活動した若い世代は、戦争経験はあるが戦後の飢え忍んだ経験を持ち、自分自身の音楽的発展に一生懸命であったことが、この２世代の音楽家・舞踊家同士を結び付け、民主的な組織作りに結集した要因となった。

（たかはし・まさみつ　本会出版局長）

私と日本音楽舞踊会議　　ピアノ　八木 宏子

人はどういう生き方をするか、は各自の生まれながらの性格から来るもの、廻りの環境からの影響、人との出会い、更には国民性等が絡んで人生を形作って行くのでしょう。
私の場合は内向的性格が影響し、なにごとにも気長にこつこつと積み重ねて行くタイプであると歯がゆく自分の性格を眺めて、なかなか変えられず、来世に託そうと諦めるのですが、音楽舞踊会議（以下、音舞会）に長く在籍する結果となったことは、その性格をメリットと見た点だと思われます。
音舞会は各種の音楽部会があり、いろいろの方々と知り合い、変化のある音楽体験が出来る希望の広がる点があります。体験上の例をあげますと；

ごあいさつ

お忙しい中をわざわざお出で頂きましてありがとうございます。

1979年に約1年ドイツのケルン音楽学校で指導を受けた曲を発表することに致しました。音楽の発祥地であるドイツのよい環境はもちろん私の栄養になったわけですが，アフリカへも時々出かけるチャンスを得，その外国生活の言葉の不自由な中で貴重な体験をしました。ケニアでの生活で，メイドがスワヒリ語しか話せず，私はつたない英語の片言で，意志の疏通は大変なものでした。しかし私の帰国真近，彼女はせっせとレースのテーブルセンターを編んでいました。彼女はそれを私にプレゼントしたのです。私はそれはそれは喜びました。1年半後私がナイロビに来た事を聞きつけて，はるばる会いに来てくれました。ふと，この事で気が付きました。これは音楽のようなものだ！　音楽も，言葉ではないが「心の表現」となる！　音楽を通じて人と人とがわかり合えたら……という願いになって行きました。微力ながらその気持を持ち続けられるよう努力して行きたいと思うようになりました。

リサイタルのプログラムに掲載された“あいさつ”文

出会い１：
ある時、私のリサイタルプログラムの“あいさつ”に、アフリカ、ケニアの話を書いたところ、助川敏弥先生から「音楽の世界」への記事依頼があり、「ケニア日記」を書かせて頂くことになったのですが、私は文章を書くことは苦手で、どうしようかとなかなか決断が難しく躊躇していたのですが、ケニアはどんな国かご披露して皆さんに理解して頂けたこと、そしてまあまあの出来であったので、書くことに関し、物怖じせずチャンスが来れば、生き方、考え方を見直し、頭への刺激にな

り、考え方が広がれば音楽にもいい影響であろうと四苦八苦しながらも受け入れることにしています。微々たる進歩も最近出した「アフリカに暮らして」の９人の執筆者に加えてもらい、始めて出版物になったのは、喜びでした。新しいことに挑戦してみるのもフレッシュな味わいがあります。助川敏弥先生に感謝申し上げます。

出会い２：

2006 年 10 月 21 日　『少年ケニアの友主催』『多摩アフリカセンター』後援。第 5 回チャリティーコンサート　調布市グリーンホール（小）

日本音楽舞踊会議声楽部会の芝田貞子さんが約４００席のホールを満席にして、講演のプログラムから音楽へという企画で「平和のためのコンサート」を長年催していらっしゃいます。その底力、芯の強さに敬服しています。このコンサートに私はチェリストとヴァイオリニストの伴奏で出演したことがありました。その経験により、その後この二人の奏者と室内楽曲を取り上げ発表するようになりました。室内楽の世界の楽しい幸せの流れのチャンスがやって来ました。芝田貞子さんに感謝申し上げます。

出会い３：

たびたびアフリカへ出掛けることが多かった私は、ケニア、ナイロビへの空路で、アフリカ研究者の先生方と出会うことがありました。「私は 100 年先を考えて仕事をやっています」と長崎大熱帯医学研究所の先生はおっしゃった。その気迫は強烈で、忘れることができません。又、阪大の先生は、「弾も 100 撃ちゃー当たる」と研究費の申請を数々取り、フィールドワークのその先生の仕事場には冷蔵庫がある、と廻りから羨ましがられ、金持ち研究者グループとして評判の的でした。
ケニア、ナイロビには日本学術振興会の事務所（以下、学振）があり、アフリカ研究でナイロビを経由して内陸に入って行く先生方が立ち寄られる。その学振で、私としてできることは料理しかない。「今日は皆さん何人いらっしゃいますか」と言って、一緒に夕食を食べながら歓談。日本からの一流の学者さんがお集まりなので、それはそれは貴重な時間。面白いお話しが聞けて、楽しいひとときでした。人と人が出会うと血が通い合うのです。ケニアにはスワヒリ語でのことわざがあります。「山は近づかないが、人は近づく」と。

（やぎ・ひろこ　本会ピアノ部会員）

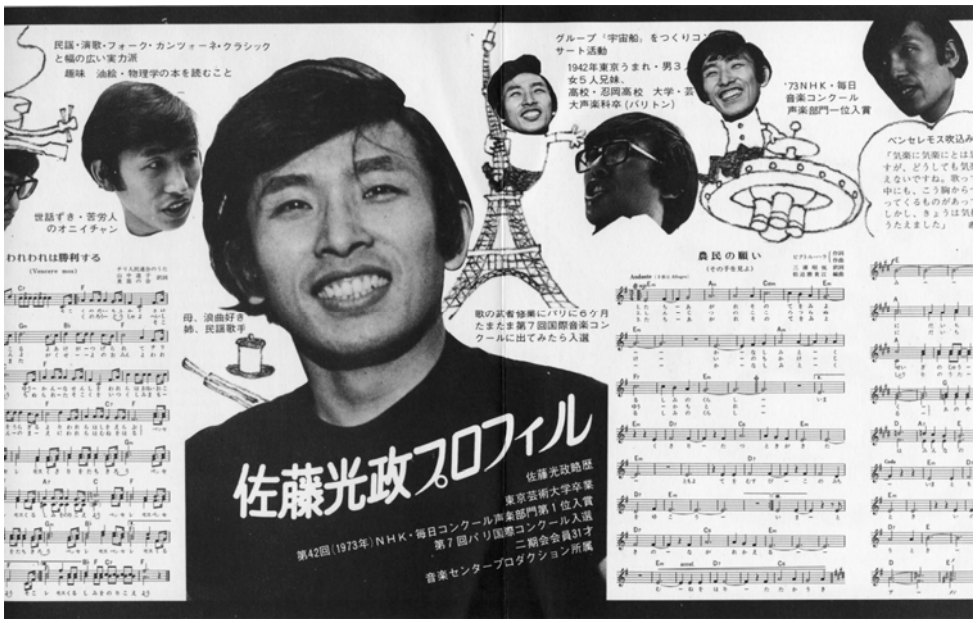
特集：日本音楽舞踊会議の半世紀（3）

“ 僕が音舞会に入会した頃・・・”

声楽　佐藤 光政

“日本音楽舞踊会議創立 50 周年”・・・半世紀、本当に、時の流れを感じる事ではあります。僕が本会に入会させて頂いたのは、あれは確か、僕が 30 代の初めの頃、そう、今からざっと 40 年近くの前の事でしょうか・・・。入会のキッカケを想い返せばそれは、あの矢澤寛氏の誘いでした。

その頃、南米の“チリ”では、民主“アジェンデ政権”が軍事“ピノチェット政権”に打ち倒され、それをチリの反戦シンガーソングライター“ヴィクトルハラ”が“ベンセレモス”と言う歌にして発表した事でした。
その歌のため彼は軍事政権より“テロ宣言”を受け、祖国を追放されたのです。しかし彼は、その祖国の実情を世界中に訴えようと、各都市を歌い廻っていた頃であります。



『ベンセレモス』のレコードに添付されている解説用小冊子の一部
若い頃の筆者の写真と、楽譜が印刷されている。

そんな彼の歌に僕は大いに感動し、その曲を日本語版としてレコーディングをした事ではあります。その“ベンセレモス”（我等は勝利するだろう）が当時、音楽評論家として名高い矢澤寛氏の耳に止まり、音舞会への入会をすすめられた・・・という次第ではあります。あの頃お世話になった矢澤氏も、寺原伸夫氏も、懐かしい石野富士江さんも、今はもう世に居られませんが、僕はまだこうして会に在籍させて頂き、舞台に立ち、演奏をしていられる有難さを、古希を迎えた今、本当に強く感じている事ではあります。感謝！！

（さとう・みつまさ　本会声楽部会員）

特集：日本音楽舞踊会議の半世紀（4）

音舞会に入会して思うこと

声楽　浦 富美

日本音楽舞踊会議創立50周年誠におめでとうございます。
私が本会に入会させて頂いたのは10余年程前でまだまだ日も浅く、諸先輩を差し置いて文章を書かせていただくなど、とても僭越なことで心苦しく思います。
私が入会したきっかけは声楽会員の嶋田美佐子さんから強く勧められたからですが、当時は本会の存在すら知らず、単純に「東京のホールで歌いたい！」・・・、ただそれだけの理由だったように覚えています。地元で地域密着のコンサート活動は続けていましたが、少し勇気を出して外にも出てみたい、と思っていたところに嶋田さんからのお誘いがあったので思い切って入会させていただきました。
入会してからは機会あるごと部会コンサートにも積極的に参加させていただき、良い勉強をさせていただいております。

筆者が初めて出演した音舞会コンサート2002年7月20日（三部会合同）右から三人目が筆者

私は常々「人の出会いほど不思議で素晴しいものはない！」と思っています。音舞会に入会させていただいたお蔭で沢山の素敵な方たちとの出会いがありました。諸先輩から音楽は勿論のこと、大切なものを沢山教えていただきました。声楽部会だけでなく他の部会と交流出来る・・・音舞会ならではのいいところです。
声楽部会では年間2回のコンサートを行っています。1回は「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」で、昔から歌われている曲を次世代に歌い継いでいきたいと数年前からシリーズ化しています。あと1回は「新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」と題して出演者が自由に選曲してプログラムを組んでいます。お客様に喜んでいただけるコンサートになるよう、佐藤光政氏を中心にアドバイスをいただきながら出演者で企画しています。これからもお客様に喜んでいただけるコンサートをめざして頑張って参りたいと思います。
昨年の東日本大震災以来何か不安な世の中になってきたように思われてなりません。このような時代だからこそ「出来る時に出来る事を」をモットーに一日も長く歌い続けていきたいと念じています。宜しくご指導下さいませ。

（うら・ふみ　本会声楽会員）

特集：日本音楽舞踊会議の半世紀（5）

会の半世紀とこれから

ピアノ　戸引 小夜子

今年は「日本音楽舞踊会議」が１９６２年に創立してから５０年、記念の行事もほぼ一年間に渡り１０公演が行われ、１２月４日の深沢、恵藤、安田氏による「ピアノと室内楽の夕べ」をもって完了する。

理事長として挨拶する筆者
2009 年 4 月　第 7 回フレッシュコンサート

月刊誌、「音楽の世界」は創立以来、年１０回発行し続け、この１２月号で５４３号になるが、私が記憶しているだけでも編集長は初代、小宮多美江氏から植田トシ子、川田思朗、長野俊樹、原田稔、矢澤寛、助川敏弥、野口剛夫、現在の中島洋一の各氏が就任し、編集部のスタッフと共にその時代の背景を映した記事を載せている。（詳細は２００８年・創刊５００号記念に）

これからの会に必要なのは何か。
会では若い音楽家を育てるために「フレッシュ・コンサート」や「若い翼によるＣＭＤＪコンサート」を毎年開催し、未来の音楽の担い手を応援している。又、各ジャンルの窓口を新しく、広くし、舞踊・指揮・弦管打などの分野を強化して今求められる「日本音楽舞踊会議」でありたいと考える。

（とびき・さよこ　本会理事長）

今年の若い翼による CMDJ コンサート開演前の記念写真
前列左から二人目が筆者

特集：日本音楽舞踊会議の半世紀（6）

この半世紀と日本音楽舞踊会議

作曲　中島洋一

日本音楽舞踊会議の創設は 1962 年、私が入会したのが 1987 年のことですから、私が会とともに歩んだ期間は四半世紀で、半世紀に及ぶ会の歴史の丁度半分に過ぎません。

しかし、日本音楽舞踊会議の創立は、1960 年の安保闘争が発端ということですが、私は 18 歳時に安保闘争を経験しており、青春期から今日に至る間に私が体験した社会史と会の歴史は、重なる部分が多いと思います。

それで、この 50 年の社会史と本会の歴史を私の視点から振り返ってみようと思います。

音楽現代

2012 年 12 月号　―創刊５００号―　定価 840 円

♪特集＝今、音楽批評（評論）を問う
・音現アーカイブ（１）
音楽批評の自立性を求めて
篠田一士+遠山一行+大木正興+中村洪介+船山隆
・音現アーカイブ（２）
吉田秀和「音楽批評を語る
・新連載　丹羽正明「音楽批評家の仕事」
♪特別企画＝音楽界、ゆく年くる年～年末年始のコンサート＆全 国「第九」公演日程
♪特別対談＝フルトヴェングラーの人間と音楽（その３）
宇野功芳×野口剛夫
♪カラーロ絵
・ウィーン国立歌劇場日本公演「サロメ」「フィガロの結婚」
インタビュー
クリスチャン・ハンマー+山賀博之
東 誠三　長谷川陽子　他

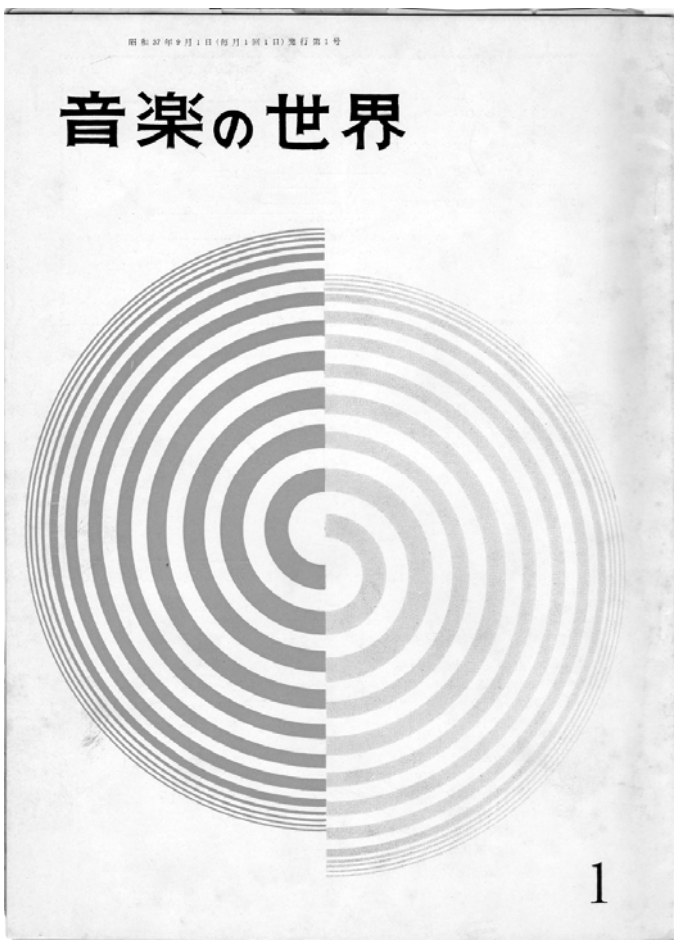
〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMY ビル 3F
芸術現代社　TEL3861－2159

安保闘争について

本年１月号掲載の『座談会：日本音楽舞踊会議の歴史』で、私がこの会の発足のキッカケになった、安保闘争から言及しようとすると、最近入会された高橋通氏から、「そういう会でなくなったと聞いたから入会しました。そういう昔のことは切り捨てて、『不一致協力』の時代の後から、やって欲しいです」との注文をつけられました。しかし、当時の記憶を振り返ってみると、あの闘争は「左翼勢力による政治闘争」として割り切れるものではなく、異なる思いを抱いた様々な人々が参加した戦後最大の市民運動であり、むしろ「不一致協力」という比喩の方が当て嵌まる運動だったような気がします。例えば私が在学した音大で、デモ隊を送り出す挨拶をした当時の学長、有馬大五郎先生などは、マルキシズムとは対極にいた人で、生粋のリベ

ラリストだったと思いますし、当時１８歳だった私は、政治的には殆ど無知で、ただ強行採決に怒りを覚え、デモに参加したのでした。

では、なぜあれほど大きな市民運動に発展したのでしょうか。政府側の対応、マスコミの影響など色々な要因があるでしょうが、1960 年といえば、まだ終戦から僅か 15 年しか立っていない頃のことです。当時の大人達の中には、戦争で肉親や友人を亡くした人も大勢おり、戦争の記憶は生々しく残っており、「戦争だけは二度と繰り返したくない」という気持ちが心に強くあったと思います。そういう中で、日米安保が戦争の引き金になるのでは、という不安を抱いたからではないでしょうか。



『音楽の世界』創刊号 1962 年 9 月発行

もちろん、進歩的文化人と云われていた人々や、革新政党の政治家、学生運動家には、この運動を、マルクス・レーニン型社会主義実現のキッカケにしようと考える人々もかなりの数いたことでしょう。しかし、私の周辺の闘争参加者にはそういう人は皆無だったと思います。私自身は、なんとなく「日米安保」が、戦争のキッカケにはならないような気さえしていていました。

60 年代の世相と世界史、そして私

安保の後、不人気だった岸内閣が退陣して、池田内閣が成立し、高度成長政策を推進します。公害問題、物価高騰などマイナスを生んだ面もありますが、ともかく経済が急成長し、東京オリンピックも開催され、国民の懐具合は急速に豊かになりました。「一億総中流階層」などという言葉が流行った時代です。

芸術分野では、豊かになった日本をターゲットに、世界の名だたるオペラ団体、バレエ団、オーケストラなどの来日公演が盛んになりました。

「日米安保」については、戦争の引き金になると危険視する見方は少なくなり、むしろ自由主義陣営に属する国家として繁栄して行くために、「日米安保」はガードとして必要という見方をする人も増えて行きました。

しかし、世界史的には、雪解けや冬への逆戻りを繰り返しながらも、東西冷戦時代が続きます。そういう背景のもと、ベルリンの壁、キューバ危機、ベトナム戦争、

1968 年の「プラハの春」の民主化運動をソ連が軍事介入して潰したチェコ事件、中国の文化大革命など、大きな政治的事件が立て続けに起こりました、

ところで、私は 22 歳～24 歳頃ドストエフスキーなどの文学に夢中になり、文学を通して歴史、社会にも関心を抱くようになって行き、10 代の頃のような政治的に無知な人間ではなくなりつつありました。

そういう中で、「共産党宣言」など、若干の政治思想書にも目を通すようになりましたが、「プロレタリア独裁」という政治システムには大きな疑問を感じました。理由を単純に説明するのは難しいのですが、ドストエフスキーを読んで、人間はこの世に授かった生を出来るだけ充実したものにしようと欲する。それを満たすのは物欲だけでなく、例えば「自分が正しい」と思い込むことだって、正義欲といった一種の欲望として存在する。それはその人の良い行動を生み出す活力にもなるが、一方、自分と考えの違う人間、あるいは集団を排除したいという欲望につながることもありうる。権力が同じ価値観をもつ党派に握られ、言論もその党派によって統制された時、政治も国家もチェック機能を失い、軌道修正が困難な独裁化が起こる危険性がある。「社会的不公正の是正を訴える社会主義者たちの理念は正しいが、論理が間違っている」というのが私の導き出した結論でした。

当時の私は、一党独裁体制のもとでは、権力側に対して異を唱えることが難しく、言論統制され、それが正しいように思い込まされてしまう具体例として、ベトナム戦争と、チェコ事件を比べてみました。ベトナム戦争については、「自由を守るための正義の戦争」というアメリカの言い分には私も疑問を感じていましたが、かなり多くの米国民もそうだったようで、米国内で大規模な反戦運動が起こっています。一方、チェコ事件の方は、自由化推進人物の中に、長距離の英雄ザトベックや、体操界のアイドル、チャスラフスカなどがいたこともあり、世界的に多くの人々の同情を買いました。しかし、ソ連の内部で、国民が軍事介入に対して反対の声を上げたということは聞いていません。そういう例もあったかもしれませんが、ほんの少数に留まったと思います。

60 年代 70 年代と進むにつれて、左翼陣営の中でも、ソ連、中国の政治体制についての評価が分かれ、マルクス・レーニン型社会主義体制により進歩した社会の実現を期待した進歩的文化人たちの夢も、しだいに萎んで色褪せて行ったのではないかと思います。

そして、私が渡欧中の 1989 年に、東欧の社会主義政権は次々と崩壊し、1991 年 12 月には、本家本元のソ連の社会主義体制も崩壊します。想定していたことではありましたが、これほど急激な政治的変動が起こるとことは、私には予測できませんでした。

私の入会と機関誌『月刊：音楽の世界』

1987 年、ひょんなことから私は音舞会に入会しました。多分、現在でも続いている深沢亮子さんを中心とするコンサートが始まった頃ではないかと思います。入会してから数ヶ月経った頃、私の推薦人だった助川敏弥氏から、「原田編集長が倒れ

たので、編集部スタッフの補充が必要になった。雑誌の編集を手伝ってくれないか」という誘いの電話がありました。機関誌には興味深い記事も多く、面白そうなので引き受けることにしました。私よりも若い高橋雅光さん渡辺文子さん（私より少し遅れて編集に関わった）も当時の編集スタッフでしたが、中心は私より一世代上の、矢澤寛、助川敏弥、寺原伸夫、石野富士江氏の面々でした。その四人は性格も考え方も異なるので、論争が昂じて時には喧嘩になることもありましたが、編集作業終了後一緒に飲みに行った時など、冗談も飛び交い、楽しい雰囲気もありました。そして、いつしか、みなさんの「自分達の言論の場を守る」という気概に共感し、私も雑誌編集や会運営にのめり込んで行きました。

私より一世代上の人達は、戦時中の軍国主義時代に青春時代を送り、大本営発表を信じ込まされた言論・情報統制の被害者だった筈です。従って「特定の政治団体の傘下に入らず、世の中の風潮に流されず、自分の頭で考え、自分達の主張を世に説いて行こう。そのためには、自分達の言論機関を維持する必要がある」という考えが強くあったのだと思います。

私は、戦争の記憶が殆どない世代に属しますが、私は幼い頃から自意識が発達し、純朴な田舎の子供達の中ではやや浮き上がった存在でしたので、他の子供達との統一行動を避ける傾向がありました。学業成績はそれほど悪くはなかったのですが、当時の通信簿には、「行動の記録」とかいう欄があり、Ａ、Ｂ、Ｃの三段階評価でしたが、自意識の項目だけが唯一Ａで、責任感、協調性の項目は最低ランクのＣが付けられていました。他の姉弟達が殆どの項目でＡだったのとは、対照的でした。しかし、家族の者や、親しい友人はその評価を信じませんでしたし、私も気にはしていませんでした。だが、付和雷同しない分、孤立化しやすい傾向にあったことは事実です。長じて、多くの文学者、科学者などが言論弾圧された歴史を知り、また、社会主義体制下のソ連、東欧の言論統制を知り、もし、権力側から「お前は有害な反社会的分子だ」というレッテルを貼られた場合などを想像して、そうなったら覆すのは難しいだろうな、などと恐怖感を感じたことがありました。

私も含めた編集スタッフは、考え方も世代も異なっていましたが、「言論の自由を守る。そのために自分達の言論の場を確保する」という共通の理念を抱いていたと、思います。

不一致協力型の組織への脱皮

私は、欧米滞在から帰国した 1991 年春から、1996 年 2 月まで、事務局長（現理事長に相当）を務めました。大学の勤務と重なり多忙で、必ずしも有能な事務局長とは云えませんでしたが、先輩諸氏や、中島克磨、金子恵美子の両事務局次長の補佐を受け、なんとかやっていました。　そして 1995 年の総会で『一致団結型の組織から不一致協力型の組織への転換』のスローガンを掲げました。それは、「会員各個人の思想と信条の自由を完全に保証すること、その上で、意見が違っても協力し

合えるところは協力して行ける組織にして行こう」ということでした。この方向転換について、政治的スタンスが比較的私と近い助川氏は勿論ですが、共産党員だった矢澤寛氏が特に強く後押しして下さり口下手の私に代わってスローガンの意味と意義を出席者に解説してくれました。彼の日頃の言動からして、私の出した方針に賛同してくれることは予想しておりましたが、それでも矢澤氏の援護射撃はとても有難かったです。私は、自分が入会する以前の会の様子は分かりませんが、安保の頃を振り返ると、むしろ、「不一致協力型組織」こそ、昔からこの会に相応しいあり方だったのかもしれないと勝手に想像しています。勿論、思想信条が大きく異なる人間が集まれば、論争は絶えないでしょうが。

会が蓄えて来た財産と、会の未来への展望

「不一致協力」宣言した後は、会員各個人の思想信条の自由を守るため、会として政治的声明を出すことを避けるようになりました。2003年のイラク戦争時には、会としての反対声明は出さず、会員有志という名目でインターネット上に反対声明を出しています。しかし、時代が変わり、会員の顔ぶれが変わって行く中で、政治色は薄まり、会の活動の軸は、コンサートなど音楽活動の方にシフトして行きます。

2002年2月11日の音舞会総会の議長席
右が議長の故矢澤寛氏、左：副議長の島田美佐子氏

核実験が繰り返された東西冷戦時代には、反核運動が盛んでしたが、核実験がなくなった現在でも、会員による平和コンサートは続けられていますし、冤罪で最近無罪が確定した布川事件のための支援コンサートを長年続けた会員もいます。また、チャリティーコンサートなど、福祉活動を行う会員も少なくありません。他の文化団体と比較して、より社会性が強い会という本会の性格は、いまでも維持されていると思います。

そして会が残した大きな財産として創刊以来50年間刊行され続けている機関誌『月刊：音楽の世界』の存在があります。今の時代において「言論の自由」は、ほぼ保証されていますが、「自分達の頭で考え、社会に向かって発言して行く」ことの必要性は、今のように行く先が見えにくく混迷した時代だからこそ、より高まっていると思います。

助川氏が今月号の論壇で「最近『音楽の世界』で、論争がなくなった」と指摘され、議論がなくなる傾向を社会全般にまで広げて論じられています。そういう現象

の要因として「平和ボケ」という言葉を使われていますが、今の時代、特に若い音楽家にとって、のほほんと安心して過ごせる世ではなく、生活と闘いながら音楽活動を続けて行くことが、かなり難しくなって来ているように感じています。ただ、今の若い人達は一般的に激しく人と対立することを好まぬ傾向があるように思いますが、その背景に「行く先が見えにくい」、「人と対立して仲間を失うことが怖い」などの不安があるような気がします。

一方、政治の世界も混迷を極めています。政治、社会、文化は見える糸、見えない糸で相互に繋がっていると思います。ただ、今の世はすべて巨視的に捉え、その上で有効な政策を打ち出すことが非常に難しくなって来ています。そういう中で、多くの政党が大衆に気に入られる政策で訴えるポピュリズム（大衆迎合主義）に堕して行きます。しかし、公約の多くが実現せず、結果的にさらなる政治不信を煽り、政治はさらに混迷して行きます。こういう傾向は我が国だけではありません。ヨーロッパの諸国もそうです。国によっては我が国よりずっとひどい状況にあると思います。

話しを我々の会に戻しますが、華々しい論争が成り立つには、自説に自信を持つ複数の論争者をかち合わせることが必要でしょう。しかし、今の時代は、考えはするが自説に自信を持てず迷っている人の方が多いのかもしれません。それなら、おずおずとでも良いから自分の意見を発表し、意見交換してみませんか？文豪ゲーテが「人は努力する限り迷うもの」という名言を吐いていますが、私も浮ついた空自信より、真摯に迷う人間の可能性の方に賭けたいと思います。「聴衆を納得させるコンサートを企画するにはどのような工夫が必要か？」とか、生活と芸術活動を両立させるにはどうしたいいか」とか、ごく身近で差し迫った問題からでいいと思います。勿論、話題を歴史、社会、芸術全般にまで広げ論じ合ってもいいでしょう。そのような巨視的な視野に立って物事を捉えようとする努力は、やがては各々の音楽芸術活動や生活に生かされて行くと考えます。

ここで、機関誌『音楽の世界』と、コンサートなど芸術実践活動の会における役割について述べてみます。私の説には少々無理があるかもしれませんが、『音楽の世界』が知恵を生み出すための片方の車輪とすれば、コンサートなどの音楽活動はその知恵を生かし、実践して行くもう片方の車輪と考えていただければ幸いです。会コンサートが開催される号で、コンサートのプログラムや関連記事を紹介するのは、そのような連携を考えてのことです。

助川氏は、**「このままでいいのか」**という政治家のスローガンを取り上げ、問題提起されていますが、会活動について、あるいは各自の音楽活動について「このままでいいのか」と問いかけられれば、おそらく多くの会員が「このままではいけない。よりよい道を切り開くため努力を積み重ねて行かねばならない」とか答えると思います。迷いながらでも、そういう気持ちを抱きながら努力を積み重ねて行けば、少しずつ道は開けて行くのではないでしょうか。

今回の特集では、文字数は多くはありませんが、私以外の５人の方々から、貴重な体験談や、ご意見をいただきました。

助川氏の論壇、この文と併せて目を通していただき、その上で、みなさんのご意見を賜ることが出来れば、それを、よりよい道を開くためのきっかけに出来るのではないか、と期待しています。

（なかじま・よういち　本誌編集長）

1998 年 1 月 7 日の新年会：右から故寺原伸夫氏、故小平一郎氏、故中田一次氏、深沢亮子代表理事、故高田三郎氏（招待客）。故人となられた懐かしい顔が見える

トピックス：日本作曲家協議会が創立 50 周年を迎える

記

日本作曲家協議会が本会創立と同じ時期の、１９６２年４月３０日に日本作曲家組合として、"民主主義と作曲家の生活と権利を守る"という主旨のもとに創立。

１９６９年４月には日本作曲家協議会と改名。
本会と同様に今年で創立５０周年になる。

高橋 雅光

連載　**音・雑記－ひなの里通信**　(53)　　狭間 壮

――ドングリが一つ――

ピカピカのドングリを一つもらった。保育園でのコンサートが終って、紙芝居などの小道具を片づけている時だった。

「これ、あげる」男の子がスモックの大きな前ポケットからとり出したのが、ちっちゃなドングリ。

ピカピカ光ってるのは、彼にとってそれが大事な宝物なのだろうと思わされる。磨いていたのかもしれない。「いいのかい、もらっても？」と聞けば、「もう卒園だから」とこたえた。

机上のペン皿にのせて、時にはその感触を楽しんだりしていたのだが、いつかまぎれてしまった。猫がサッカーボールよろしく、タンスの裏に蹴りこんでしまったのかもしれない。

貧しい戦後、子どもにとってドングリは、かっこうの遊び道具の一つ。小学校の低学年のころ、私にとって秋のドングリ拾いは夢中になれる遊び。腹もすかしていたので、食べてみたりもした。唯一、頭のとんがった細い色黒のシイの実だけが、生のままで食べられた。

ピッカピッカに磨いて、友だちと見せあって、光りぐあいと大きさなどを競ったりもした。俗に言われるところの「ドングリの背くらべ」の言葉も知らないころだ。

まるいオカメドングリが好きで、二つ重ねて彩色して人形を作った。良くできたと、母にほめられうれしかった。

やがて、学年が進み、いつしか興味はうつって「卒ドングリ」になっていた。

そんなある日、宮澤賢治の「どんぐりと山猫」を読んだ。ドングリたちが、その優劣を競い合い、ついにはその裁定を山猫に仰ぐ、という話だ。

ドングリたちは、頭がとんがっているのが１番、いやまるいのが、いや大きいのが、いや背の高いのが、と大さわぎ。

一郎少年が山猫裁判長の助人に頼まれて。さて、この後は正確さを期するため、原著にあたる。なにしろ判決なのだから。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたしだ。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていなくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」

ドングリを調べる

宮澤賢治は、ドングリどうしで競わせたけど、私たちも、自分のドングリが１番！と言い合っていた。何だか似てるゾと、そのことがみょうにおかしく、うれしかったのだった。

賢治の中のドングリを図鑑であたってみた。トンガリ頭はマテバシイ。頭のまるいのは、私の好きなオカメドングリのクヌギだったのだ。大きいのはミズナラ、背の高いのはコナラだろう。

ドングリの背比べ

まあいずれにしても、栗から見たら団栗（どんぐり）は、どっちもどっち。「どんぐりの背くらべ」ということなのか。

保育園、幼稚園の卒園式の定番曲「おもいでのアルバム」がある。春夏秋冬の思い出をふりかえる歌。秋には「ドングリ山のハイキング」がでてくる。

男の子がくれたのは、ちっちゃなドングリ。賢治の話の中では、その他の大勢扱いで、出てこない。きっとカシの木の実だろう。どこで拾ってきたのか。男の子の手の温（ぬく）とさをほんのり残して、その時私の手のひらで、ピカピカと光っていた。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま　たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 34 回〕　失われた楽器のための名曲

変化の激しい時代である。10 年も経つと大抵のものは形を変えてしまい、古いまま存在しえるのは、一部の文化や伝統工芸あるいは食品くらいなものである。そんな中で、100 年 200 年前のクラシック音楽が依然として聴かれたり演奏されているのは、考えてみればふしぎな気がしてならないが、しかしマクロ的に眺めれば、この世界だって決して変化がないわけではない。

例えば、かつてよく聴かれたセミ・クラシックが多彩すぎるのかあまり聴かれなくなったのに対して、長すぎて聴かれていなかったブルックナーやマーラーの交響曲、あるいはオペラが盛んに聴かれるようになったのがそうだし、大家とならなければ録音の機会が少なかったレコード界に、新人演奏家たちが次々と登場しているのもそう。あるいはコンクールが増えすぎて権威が落ち、ヨーロッパでは有名コンクールに入賞しても殆んど話題にならなくなったというマイナス。同じく日本でもコンサートが衰退し、ポピュラー音楽の曲目とミックスさせたプログラム（いわゆる J. クラシック）によって若者を呼び込んでいるという事実など、全体的に見れば、衰退の兆しを見せる変化が刻々と進んでいる。

こうした中で、作曲家や作品の人気が浮いたり沈んだりするのは、短期的にだけでなく歴史的に見ても、まあ仕方がないと思えなくないが、じつはもう一つ、音楽を生み出す道具（手段）である「楽器」についても、同じことがあるのである。つまり大抵の楽器が進化存続する中、哀しくも消えていってしまった楽器があり、そのために書かれた曲だけが残っている――という例である。

そういうと、私たちも身近なところで思い出す楽器がある。かつて若者たちのアイドル楽器であったハーモニカが廃れ、それに代わったのがリコーダー（ブロックフレーテ）であること。あるいは楽器バンドの中心であったアコーディオンやオルガンが、今ではピアノやクラリネット、リコーダーに代わっていること、である。ただし、これらは主流でなくなったというだけで、現在でも立派に存続している。以下にご紹介するのは、そうでなく歴史から消えてしまった過去の人気楽器である。

まず一つは、アルペジョーネという楽器である。別名ギター・チェロとも呼ばれるこの楽器は、小型のチェロすなわちヴィオラ・ダ・ガンバ（足で挟んで弾くヴィオラ）に似た形で、6 本弦である。指板にはギターと同じフレット（桁。24）がついていて、弓で弦を擦って音を出す。要するにギターを弓で弾くようなものである。“音色はオーボエに似て美しく柔和。低音はバセット・ホルンに近く、重音奏で半音階的なパッセージも容易に弾くことが出来る”と形容した記録がある。

アルペジョーネ

1823年にウィーンのJ.G.シュタウファーという人が考案し、V.シュスターによる教則本などが出て、一時は大人気となった。演奏家たちにも好んで取りあげられたらしいが、なぜかその後、たちまちに姿を消してしまった。唯一つ、この楽器のために書かれたものとして現在まで残っているのは、シューベルトが1824年に作曲した「アルペジョーネ・ソナタ　イ短調」（全3楽章。アレグロ／アダージョ／アレグレット）だが、楽器が消えてしまっているため、通常はチェロ・ソナタとして演奏されている。6本弦用だったものを4本弦のチェロで弾くのでかなり難しそうだが、しかしじつに美しい曲で、人気も高い。

ほかにヴィオラ、フルート、コントラバスで弾かれることもある。

もう一つは、リラ・オルガニザータという楽器。これはハーディ・ガーディ（中世から18世紀にかけて、ヨーロッパで愛好された4弦の弦楽器）を、オルガン風に改良したもの。リュートやギターに似た胴体の中に2本の旋律弦が内蔵され、右手でクランクを廻すと、木製の輪車が動いて弦を擦る仕組み。左手で鍵盤を押して音階を調整するのである。ハイドンはこの楽器を気に入って、5つの協奏曲と8曲の「ノットゥルノ」を作曲したが、その後なぜか下賤な楽器として衰退してしまったため、今日ではリコーダー、オーボエその他の楽器に置き代えて演奏されることが多い。

名曲が残されている点では、もう一つ「パンハルモニコン」という楽器を忘れることが出来ない。日本でもオルゴール博物館などで見かける自動演奏装置（コインを入れると、いろいろな楽器が音を出すもの）に近いものと思われるが、ベートーヴェンの「戦争交響曲（管弦楽曲ウェリントンの勝利）が、じつはこの楽器のために書かれる筈だった点で、どんなものだったか興味をそそられる。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【連載】

音盤奇譚

板倉 重雄

第 39 回

ギドン・クレーメルの批評的演奏

久しぶりにスリリングなコンサートに出会った。サントリーホールでのギドン・クレーメル公演である。４回シリーズのうち、私は後半の２回を聴いたが、改めて「演奏」とは「批評」であることに感じ入った。

３日目前半はフランク 20 歳の作、協奏的ピアノ三重奏曲 Op. 1-1 と、晩年のヴァイオリン・ソナタが組まれていた。三重奏が始まった途端、私は驚いた。嬰ヘ短調の陰々滅々たる曲調を、彼らは延々ピアニシモで演じたのだ。息もできないような緊張感に、私は危うく窒息しそうになった。楽章が終わったあとの聴衆の咳払いが大きかったこと！

続く有名なヴァイオリン・ソナタ、クレーメルは色彩を消した細身の光線のような音で演じた。フレーズは短く、音量もｐやｐｐに傾きがち。その細身の音には細かいヴィブラートがかかり神経質に打ち震えていた。彼はフランク最初の作と、ベルギーからフランスに帰化した後の晩年の作品を並べたことで、その作風がベル・エポック風の装飾性を帯びたことを示し、かつその装飾を演奏によりはぎ取ってしまったように私には聴こえた。

クレーメルは自分がリガに生まれ、音楽をロシアで学んだことを強烈に意識して演奏活動を行っているに違いない。それはフランクをフランス人奏者が弾く態度と明らかに違ったものとなったこと、3 日目後半のチャイコフスキーの三重奏曲を「自分たちの音楽」として実に伸びやかに演じたこと、そして 4 日目前半でバッハとロシアの現代作曲家グバイドゥーリナを並べたことにも窺えると思う。

今回のシリーズでは、クレーメルの演奏とプログラミングにおける批評性のほかに、彼の響きと間に対する研ぎ澄まされたセンス、引き締まった造形も強く印象に残った。4 日目のバッハ（第 2 番）とイザイ（第 5 番）の無伴奏ヴァイオリン・ソ

ナタなどその好例だった。クレーメルが今なお世界のトップ奏者であることを証明したような演奏会だった。

●イザイ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ全集　（写真　前ページ）
　ギドン・クレーメル（ヴァイオリン）
［ビクター　VIC-2145（LP 廃盤）］

　1976 年、ミュンヘンでの録音。このソナタ集のレコードが数種しかなかった頃の録音で、クレーメル盤の登場により一躍作品の認知が高まった。初期の頃からクレーメルのレパートリー選択は刺激的だった。研ぎ澄まされた響きや間のセンスは実演同様の見事さである。CD は露ヴェネツィア　CDVE04295 で入手可能。

●シューベルト：幻想曲ハ長調 D934
●F.X.W.モーツァルト：グランド・ソナタ　ホ長調
●ベートーヴェン：《フィガロの結婚》のアリア「もし伯爵様が踊るなら」による 12 の変奏曲
ギドン・クレーメル（ヴァイオリン）
エレナ・クレーメル（ピアノ）
［蘭フィリップス　9500904（LP 廃盤）］　（写真　右）

　1980 年、スイスでの録音。シューベルト晩年の幻想曲では、人生を走馬灯のように振り返る趣きの変奏曲楽章が多彩な表情付けで秀逸。モーツァルトの息子、フランツ・クサヴァーとベートーヴェンの珍しい作品をカップリングして、シューベルトの様式との近似を示したクレーメルらしい一枚。いまだにこの形で CD 化されたことがないのが残念。

【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」（アルファベータ）を上梓。

私と、ラジオ・ドラマ

連載第 6 回　　作曲　助川 敏弥

「劇伴」という言葉がある。放送劇の伴奏音楽のことである。いまでは、ラジオ、テレビ、両方の場合を意味する。舞台劇の音楽と映画音楽にはこの言葉を使わないようである。「劇伴」という言葉は業界用語だろうが、裏には、その場かぎりの消費音楽、こづかいかせぎの音楽、という、一種の蔑称のような意味がひそんでいる。新作オペラの出来がわるいとき、「しょせん劇伴だ」、というように使う。作曲の出来のわるいもの、やっつけ仕事という意味である。

しかし私は「劇伴」の仕事をそう考えなかった。この機会を利用して自分の技術を習得するための貴重な場として利用しようと思った。これは考えようによっては損なやり方である。費用対効果からいえば、多額の報酬が出るわけでもないのに、反対に最大の努力をそそぐのだから。事実、私は、小型の番組で作曲料も当然僅かな仕事のために徹夜したこともある。商業的価値観からみれば馬鹿げたことである。しかし、損か、得か、という意味は価値のとりようによる。作曲料が安いからこそ、この機会を利用して最大の得られるものを得ようとするのだから本当は損ではない。たいへんな欲張りなのである。「劇伴」では NHK の場合、演奏者はたいていは 10 人前後以内である。しかし、この 10 人は最上級の演奏家たちだった。前回にも書いたように主要オーケストラの首席クラスの人たちである。楽器の使い方、機能、ましてその組み合わせ効果は、内外の楽器法の名著といわれる書物を幾ら読んでも、はたまた、えらい人の作品のスコアを幾ら研究してもわかるものではない。目の前で生きた演奏家が音を出してくれて、いい音を聞いたり、出しにくい音で、よくない音が出たり、そして演奏者本人から、よろこんでもらったり、苦情を言われたり、人のふれあいがあってはじめて身につくものである。私にとって「劇伴」はその現場としては最もぜいたくな学習の場であった。私はここで経験を積むことによって、編成の大小にかかわらず、楽器法、管弦楽法の望む限りの技術を習得した。大編成オーケストラの場合は花輪さんの番組が編曲ではあったがその場であった。
楽器は生き物である。それぞれが本能的に独自生来の本性動作を持つ。動物のようなもので、馬は走ること、鳥は飛ぶこと、魚は泳ぐこと、それが本来の本性である。それぞれの楽器もまた、本性の機能を持つ。馬を見たことがない人、ふれたことがない人、そんな人が書物で馬のことを幾ら読んでも馬を御することはできない。絃楽器も管楽器も打楽器も鍵盤楽器も、馬や鳥と同じ。これらの生き物にじかに触れて御するすべを覚えることが出来る場、それがスタジオの仕事である。作曲料の安いことは一要素に過ぎない。

指揮者の岩城宏之がいつか言っていた。第一級の演奏家で、一回だけの練習で本番録音するのと、二級の演奏家で二日かけて練習録音するのと、どちらが結果がよいか。前者の方がよいのである。「うで」がいい人で一回だけの方が結果がいい。なるほど当然である。それが「うで」というものだろう。
放送劇の音楽録音ではラジオでもテレビでもすべて一回で本番である。二日、二回ということはない。つまり、演奏者は通称「初見」で演奏する。これは当たり前のことで、その場であたえられた譜面をその場でこなさなければならない。私の場合、すべて練達の人たちで、岩城のいう一回ですませる人たちだった。これはまったく爽快な経験で、この仕事がいまでも心地よい思い出に残っているのはそのためである。

現場を経験しない学習は、畳の上の水練。水に入らずに水泳を練習するようなものである。
私は、北国生まれのせいか、元来内向きの性格があり、若い時から現場に出て立ちまわる性質ではなかった。いわば、書斎の勉強家型、机上の勉強家の型であつた。だから、音楽コンクールに応募した時も、はじめてのオーケストラ作品で、話にならない出来のわるいスコアを書いていた。これを毎日、私の下宿に押しかけて改善してくれたのは、親友であつた山本直純と岩城宏之であった。岩城は当時まだ指揮者ではなく、打楽器奏者だった。直純はすでに早くから現場に出て仕事をしていたし、現場と学校とどちらが主たる本拠か不明な男だった。彼らは現場の経験をとことん持ち込んでくれた。熱心の余り、野次馬コンサルタント二人が私の前で激論することもあった。作曲した当人を無視して二人で議論しているのはいかにも珍なものだが、有難い友情である。二人ともすでに世にいない。感謝しきれない青春の友であり友情であった。

スタジオで仕事するようになった時、演奏者たちとの人間関係も大事な要因である。ここでも人見知りするはずの私はすぐにそれがなくなった。ほとんどが、学校の学友たちだったからである。学校の交友がそのままスタジオに移動したようなものであった。録音が始まるまでスタジオで世間話に興じる気楽な場であった。

（すけがわ・としや　本会　代表理事）

コンサート・レポート

様々な音の風景 IX

日本音楽舞踊会議の特色は、作曲家が会員の過半数を占める音楽団体の多い中で、演奏家や舞踊家も会員として大きな存在価値を示していることである。ゆえに会員外の作曲家も多く含む総括的な「様々な音の風景」が可能なのである。この公演は、2004 年より毎年、20 世紀以降の国内外の作品を特集する好企画（企画制作・北條直彦）。今年は日本音楽舞踊会議の創立 50 周年記念シリーズにも組み込まれ、様々に思いを巡らせる選曲でもあった。とはいえ、初演曲がなく、すべて再演による回顧となってしまった点は賛否両論あろう。加えて、作曲年が解説を熟読しないと判らなかったり曖昧な点、作曲者の生年記載が殆どない点などは改善を願いたい。

幕開けは林光（1931-2012）の《ピアノソナタ第 1 番》（1965）。1960 年代が約半世紀前になってしまった時間の流れを思いながら、切れ味の鋭い音楽に触れた。栗栖麻衣子はモノクロームな色彩に陰影で構築を描く。林は、意識的にバルトークの流儀で書いたとあるが、時代の流行を逆手に「本歌取り／換骨奪胎」で作曲するのも日本人の得意とする創作法であろう。時間が経っても流行りのスタイルが変わるだけで、やっていることは変わらないと批判もあろうが、それを踏まえた上でも職人的技術は見事であった。

以下演奏順に記す。エルヴィン・シュルホフ（1894-1942）の《ヴァイオリンとチェロのためのデュオ》（1925）。シュルホフはドイツ系ユダヤ人としてプラハに生まれ。ジャズやダダイズムの影響による前衛音楽の先導者でもあり、《ソナタ・エロティカ》（1919）なる珍作（実際は根源への視点もある原始音楽へのアプローチ）もある作曲家だ。ヤナーチェクに捧げられた当夜のデュオは民俗的素材が散りばめられた佳曲。重音やピチカート、コル・レーニョ、フラジオレットと仕組まれた難所を物ともしない若い奏者 Vn 粟津惇と Vc 奥村景による堂々とした弾きっぷりで頼もしかった。ホールの響きもあろうが、民俗色や男らしさの表現にフォーカスされてしまった部分もあるか。

北條直彦（生年記載なし）はピアノソロ 2 作。《「響相」記憶の風景へのプレリュード》（いつの曲か記載なし）は精緻な書法と吟味されたリズムが躍動となる前奏曲。加えて、2000 年「調性音楽を考え直そう」という企画で初演された《ピアノのための 3 つの小品〈青き夜の詩〉〈小さな絵から〉〈茜色に暮れて〉》（正確な作曲年記載なし）。ジャズ語法も意識したムーディーな和音の流れが心地良い。池内友次郎、矢代秋雄、三善晃の師事、ビル・エヴァンズに魅せられてジャズ活動もする北條は、調性と言えども、広大なバックグラウンドからの上澄みだけを使うよ

うな厳しい自己批判で挑む。古川五巳は多層的な時間構造と響きの流れを見事に弾きわけ、ダイナミズムとした。

鈴木登（生年記載なし）《「被曝地蔵によせて」～弦楽四重奏のためのレクイエム～》（1994）は広島の原爆投下で被曝した「子育て地蔵尊」によせて、目黒区被爆者の会の委嘱により作曲、初演は「子育て地蔵尊」が祀られる目黒区の常円寺にて音楽法要の読経に組み入れられてなされた。独奏チェロの〈序〉、弦楽四重奏となる〈祈り〉〈怒り〉〈浄化〉〈結〉の5部構成で全曲続けて演奏される。本日は4度目の再演。安田謙一郎による独奏vcのモノローグの存在感、そしてvn恵藤久美子、繁桝百合子、va斉藤和久を加えたオスティナート、次第に美しい祈りの旋律が天に昇るように消えて、虫が鳴くような音型によるコーダが見守る。

武満徹（1930-1996）《「揺れる鏡の夜明け」～ヴァイオリンデュオのための～》（1983）は大岡信とトマス・フィッツシモンズの連作詩に基いた4つの部分〈秋〉〈過ぎて行く鳥〉〈影の中で〉〈揺れる鏡〉からなる曲。恵藤久美子と田口美里のVnデュオが武満トーンの色彩を温かなグラデーションで聴かせてくれた。

中嶋恒雄（生年記載なし）《万葉集による挽歌》（1986）は当初Sop、va、箏のために作曲されたのをSop中嶋啓子、Vn千葉純子、Vc、安田健一郎に改訂しての演奏（改訂初演かどうかの記載はなし）。柿本人麻呂が妻を喪い泣き悲しんで作った長歌による曲。中嶋は実験工房のメンバーでもあった佐藤慶次郎の弟子であり、この曲は佐藤が認めた数少ない中嶋曲。前半はvnとvc、後半のsopを加えた部分は緩急緩で構成されていた。タイトルから連想される曲想の範囲内ではあったが、後半のアレグレットの部分は悲しみが極限に達する超現実的な叫びが聴き取れた。

ベラ・バルトーク（1881-1945）《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第1番》（1921）はバルトーク40歳の作。演奏が始まってVn北川靖子、Pf北川暁子の音色への配慮に気づく。民俗性で語られがちなバルトークの音楽であるが、時間軸における音色とダイナミクスへの絶妙な構成でパースペクティヴをつくり上げる才能を持つ類まれな作曲家であることを再認識させてくれた。北川デュオは見事に音の建築を完成させた。音だけですべてを表現し尽くすバルトークに見習うべき点は多い。文学的な解説に耽溺し、音で語らずに解説で語る現代音楽に対する警鐘は過去からも響いてくる。

西　耕一（にし・こういち）音楽評論家

（2012年10月15日、すみだトリフォニーホール小）

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

コンサート・レポート

若い翼による CMDJ コンサート 5

東京に木枯らし１号が吹いた 11 月の日曜日、今年で５回目となる「若い翼による CMDJ コンサート」が開催された。将来が期待される若い演奏家たちの紹介という役割を担ってきた本コンサートであるが、今回は、本会の創立 50 年を記念して、深沢亮子と栗栖麻衣子の連弾による特別出演が用意された。

出演された「若い翼」の方々は、声楽が４人とピアノ独奏が２人、それにヴァイオリンが一人。声楽はいずれもソプラノの方であった。

司会は佐藤光政氏。演奏者をあたたかくステージに迎え、演奏後は、インタビューのマイクを向け、それぞれの将来にエールを送っていた。「若い演奏家の紹介」という本コンサートの趣旨に沿う演出であった。時には客席に下りて、演奏者に聴衆の感想を直接届ける、という計らいもあり、会場内のコミュニケーションを深めることに一役買っていた。

インタビューで実際の話、声を聞くと、演奏から想像するご本人の性格とほとんどギャップがなく、やはり演奏にはご本人の人柄が滲み出るものだと思った。

オープニングは、宮木孝枝（ソプラノ）による中田喜直『むこうむこう』とドニゼッティ『この清潔で愛らしい宿よ』（オペラ「リタ」より）。ステージ映えのする華のある方で、素直な発声に好感が持てた。ある程度の舞台経験を既に積んでいると思われ、舞台上での視線の定め方も自然であり、聴衆の反応を楽しみながら演奏する余裕が伺えた。中田喜直の歌曲は、第１曲目であったからか、または日本語の発音が歌いにくかったからか、特にフレーズの歌い出しが滑らかではないように感じるところもあったが、ドニゼッティは主人公リタになりきって、気持ちよく歌い上げていた。ピアノは中野友裕。呼吸をよく読み、安定した伴奏であった。

次に登場したのは、芹沢妙子（ソプラノ）によるモーツァルト『静けさは微笑みつつ』K.152 と『私は行きます、でも何処へ？』K.583。１曲目は、音程と発声が安定せず、歌声に緊張を窺わせたが、次第にホールに馴染み、２曲目に入ると、フレーズや音節の隅々まで気を配った丁寧な歌唱にまとまった。ピアノは山木千絵。

この日初めてのピアノ独奏となった上埜マユミはリスト『ハンガリー狂詩曲第２番嬰ハ短調』を演奏。演奏後のインタビューではリストとショパンが得意とのことだったが、それを裏付けるような、自信あふれる力演。フレーズや呼吸の取り方に独特のセンスを持ち、そこで好みが分かれることもあろうが、歌心あふれる演奏であった。

続いてドビュッシーの「アナカプリの丘」「沈める寺」（前奏曲第１集より）と「花火」（同第２集より）を演奏した浅井隆宏（ピアノ）は、大学４年生。卒業試験のリハーサル代わりにこのステージに立ったのかと思ったが、インタビューによ

ると、卒業試験とこのステージとは無関係の様子。また、あえて得意のベートーヴェンを弾かずにドビュッシーを選曲したとのことだった。慎重に絶えず何かを模索するかのように演奏していた謎が解けたような気がした。柔らかな音色はペダルとのバランスもよく、演奏が進むにつれて、ホールに気持ち良く響くようになった。本番に聴衆が入ってからではないとわからない、音響上の問題を、冷静に耳を駆使して調節することに成功していた。

休憩後は再び声楽の演奏から。齋藤亜里紗（ソプラノ）によるチェスティ『いとしい人の回りに』とアルディーティ『くちづけ』。表情豊かで健康的な歌声は、第１曲目のチェスティでは控えめに映っていたが、アルディーティになると、まさに水を得た魚のように、生き生きとリズムに乗り、彼女の魅力が存分に発揮された。その分、古典歌曲の難しさを痛感させる選曲でもあった。ピアノは中野友裕。この日、２回目の伴奏で、作品ごとに柔軟に奏法を変え、歌い手にやさしく寄り添う好演であった。

続いて杉田聖子（ソプラノ）の、　J.S.バッハ『あなたがそばに居たら』BWV508とモーツァルト『あなたは忠実な心をお持ちです』K.217。バッハでは、中音域が不安定で、テンポがもたれる箇所があった。その一方でピアノ（山木千絵）が先を急いでいる感があり、そのアンバランスが気になった。杉田のテンポ設定は、ピアノが考えているより、もうすこし遅めだったのだろう。モーツァルトは、途中何度か現れるコロラトゥーラを楽しんで歌い上げた。やはり、楽しそうな表情で歌われると、会場も和やかになるものだ。

独奏最後の演奏は、この日唯一のヴァイオリンで、塩川翔子によるラヴェル『ツィガーヌ・演奏会用狂詩曲』。インタビューでもその真面目な人柄が印象に残ったが、演奏も至って真面目で、真摯な姿勢で常に作品に向かい合っていた。演奏に隙がなく、鍛えぬかれたテクニックを丁寧に駆使していた。聴衆の耳を集中させ、会場がほどよい緊張感に包まれた。ピアノは宮崎若菜。プロフィールから想像すると塩川の同級生であろうか。互いの信頼感があってこそ生み出された快演。

コンサートの最後は、本会創立50周年記念特別演奏。深沢亮子と栗栖麻衣子によるピアノ連弾で、フォーレの組曲『ドリー』op.56が演奏された。深沢亮子と栗栖麻衣子は、それぞれ本会代表理事と理事であるが、それ以上に師弟という強い絆がある。師弟でステージに出てくる、というその光景だけで、会場は和やかな雰囲気に包まれた。

連弾は、プリモを深沢、セコンドを栗栖が担当した。巷で見かける発表会の連弾では、例外なく師匠がセコンドを担当するので、今回なぜプリモが深沢なのか、多少疑問に思っていたが、演奏を聴いて理由がわかったような気がした。深沢の気品ある高音域の音質や、ウィーンの香りが漂う旋律の歌い方は、プリモでないと発揮されないし、またこちらも楽しめないのだ。特に「キティ・ワルツ」や「スペイン風の踊り」などで、その魅力は存分に発揮された。栗栖はすこし遠慮が感じられた

が、時折見せる柔らかな表情に、おそらく通常のステージとは異なる安堵感を抱いていたのではないか、と感じた。

本会では、今回のような若い演奏家を紹介するコンサートが年に何度か開催されている。それは紹介に限らず、若い音楽家に本会を知ってもらい、将来は共に同じ会員として活動していきたい、という願いも込められている。そのような状況で、惜しいと思われたことが一点。演奏後のインタビューである。司会では、軽妙な語り口で会場や出演者の緊張を和らげて、出演者にも好意的に接していたのだが、演奏後の質問や感想が、容姿に向かってしまう傾向があった。確かにスタイルがよく美しい方々が揃ってはいたが、出演者たちが鑑賞してほしかったのは演奏であり、容姿ではない。捉え方によっては、ご本人の気分を害するであろう質問も残念ながらあり、ステージ上で愛想笑いせざるをえなかった方たちの心中を思うと、胸が痛んだ。一昔前ならば冗談で終わる話なのだろうが、本会に対する誤解を招かないためにも、今後は細心の気配りをお願いしたい。

湯浅玲子　（研究評論）

（2012 年 11 月 18 日（日）すみだトリフォニー小ホール）

フォーレの『ドリー』を連弾する深沢亮子（前）と栗栖麻衣子

特別寄稿　ダンスと教育　～心から踊る～

舞踊　清水 フミヒト

私は、執筆活動とは、あまり縁があるわけではないのですが、人とのご縁のなかから生まれたものは、あまりお断りすることなくおりますので、この度、このような形で、皆様との出会いもいただき、とてもうれしく思います。私は、「心から踊るとは、何か？」を探求している舞踊家です。音楽、様々な空間、想像や妄想からテーマを見つけて、ダンス作品にしたりします。ダンス作品を生み出すのは、私の場合は一人の力だけではなかなか産み出せないのが現実です。泉のようにイメージが湧いて出てくるものではなく、産みの苦しみをいつもどおり味わい、つかの間の充実感や、時々、達成感で体の力が抜ける感覚を味わったりする時もあります。

さて、現在そんな活動をしていますが、ダンスを通して出会う現場としては、教育の現場に携わらせていただく機会が少しずつ増えてきています。指導させていただく場面としては、小学校でのダンスワークショップ、大学の非常勤講師、各地で開催するコンテンポラリーダンスワークショップ、ダンススタジオでのレッスンなど、ダンスを通して、たくさんの出会いをいただいております。

教育者としての視点からお話しすることは、未熟な私からはできかねますが ダンスでいてだいたご縁の中からお話をさせていただきます。

私の母校でもある北海道の大学にモダンダンスクラブという、創設３０年を迎えるダンス部があり、私は、ここの卒業生なのですが、当時私はそこを卒業し、ダンスの勉強のために上京、私自身も厳しい指導を受けながらでしたが、クラブからの要請をいただき、そして 25 年経つ今もダンス部コーチという立場で一年に 10 回程度北海道のその大学に通っています。

ダンス部員は、ほとんどがダンス未経験者な学生で、入学し先輩のダンス披露に魅了され、ダンスと出会います。入部後は、とにかく体を動かしリズム、創作、トレーニングを体験していきます。まさに肌で感じ、まだまだ小さな夢のはじまりの手応えすらわからず没頭していくのです。でも、今思えば現実の恐怖と向き合うにはそのくらい夢に向かう行動が必要と感じます。指導者も恐怖に包まれない大きな夢を描いていかなくては…。

話は前後してしまいますが、私は高校の体育の先生に子供の頃から憧れていました。そして大学で教育実習に参加した時の事でした。私の事を「先生」と、生徒

はもちろん、父兄や先生までもが呼ぶのです。その本人は先生が参考にする教科書を鵜呑みに授業計画を立てたりで、「自分の言葉で先生として話す事ができなかった。」のです。私はもっと、経験と勉強の場が必要であると感じ「今、心から勉強したい事は何か？」若かった私は迷わず「それは、ダンス！」でした。根拠のない自信は恐怖を抱く事もなく念願叶い、夢の東京でのダンス生活が実現、先ほどのダンス部コーチもスタートしたのでした。

ダンスの練習風景　右端が指導する筆者

当時かけだしコーチだった頃、私は私のダンスの先生のおうむ返しコーチでした。師匠は厳しくスパルタでしたので私も学生に厳しく接していました。妥協せず、厳しく、大きな声で。すぐに結果を求める指導でした。でも、救いを言えばとにかく熱心でした。年齢もあまり変わらないので、ダンスにしがみつきもがいていた私は、すべてをそこに注ぎ込んでいました。そんな状態が続いていた頃、ふと思いました。私が教育実習で思った事、「自分の言葉で伝える力が足りない」だからダンスを学びたいと考えていたのに、私は学生たちに「私が伝えたいこと」を押し付けてしまっていた事に気がついてしまいました。

その頃私の表現ができない「踊らされるダンス」がいやだと悩み、そして自身から踊るダンスをしたい、でもなぜできないのか悩んでいました。私は同じ悩みを、学生たちにも与えてしまっていたのでした。

その頃、大学の恩師が私のそんな指導をみていて「清水君、学生たちを少し待ってあげてくれ…。」その一言から、私の修行が始まりました。「待つ事」、「学生のやってみたい事を採用し実現させるサポートをすること」「私が話すのではなく、聞き上手になる事」「上から目線ではなくコーチとして認めてもらえる言動を心がけること」など。自信のなさをコーチという立場の鎧で身を固めていた私が、相手の気持ちになっていく事で見つけられた新たなはじまり，それが現在の創作活動につながります。

自身の若い頃の経験から学び、人生に無駄はないと信じます。今、若く迷走するエネルギーを肌で感じる事のできる現場、そこで声を聞き，耳を澄ませ、私ができる事を日々探し見つけて、私がそこに関わることが必要であるかを問います。そして、相手に届く言葉、声の大きさ、伝えるタイミングを見つけ出し、必ず伝えること。そして、返事が返ってきても、今は来なくても本人の意思と行動を見守る時間を互いに生み出すこと。私は今、そんなことをしています。乱筆乱文でお許しください。

（しみず・フミヒト　舞踊家）

【清水フミヒト プロフィール】

一瞬にして舞台の空気を変える存在感、足の先から指の先まで全てを使い表すその表現力は高く評価され、ジャンルを超えた様々な舞台でゲストソロダンサーとして活躍。豊かな感受性と踊りに対する情熱を源に、長い手足からあふれ出る動きは繊細かつ大胆。軽やかに宙を舞い、時には鳥肌が立つほど鋭く突き刺す演技は決して一つの型にはまることはなく変幻自在。大きな身体から溢れ出るダイナミックな演技と少年のようなナイーブな感性で舞台に挑んでいる。
韓国、中国、ニューヨークなど、国内外で活躍。第 58 回東京新聞主催全国舞踊コンクール第一位文部科学大臣賞、東京都知事賞など他多数受賞。
平成 20 年度新進芸術家海外留学制度 1 年派遣研修員としてニューヨークで活動。
ソロ作品「FLOWER」発表。

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

【11 月号の訂正】

◆11 ページ右上の写真の説明

群舞の動きを指導する筆者（右）【誤】→　群舞の動きを指導する筆者（左）【正】

◆11 ページ下の写真の説明

公演写真　『火の鳥』より　2005 年 1 月　東京芸術劇場　小ホール（誤）　→中ホール（正）

読者の皆様および井上恵美子さんに対して深くお詫びします。

電子楽器レポート・連載 - 1

JSEKM（日本電子キーボード音楽学会）第 8 回全国大会

研究　阿方　俊

電子鍵盤楽器の演奏・教育・理論に特化した JSEKM の全国大会が、11 月 11 日、文教大学北越谷キャンパスで以下のプログラムで開催された。音舞会から、中島洋一、高島和義、西山淑子（敬称略）の 3 氏が参加した。概要をレポートしたい。

プログラム

10:30	あいさつ　西　義一（会場校）　柳田孝義（代表幹事）
10:45	基調講演　梯郁太郎（ローランド創始者）＊録画による
11:30	総会
13:00	パネルディスカッション（森垣桂一、宮本賢二朗、西岡奈津子） 事例発表（脇山　純、三谷　温／森　篤史／諸井野ぞ美）
14:45	研究発表（金銅英二／桐野義文、市川侑乃、小沢真弓、古田政伸 白岩優拓、松本裕樹、三木純一、宮本賢二朗、田中功一／小倉隆一郎）
17:00	研究コンサート（西義一、文教大学教育学部音楽専修生、同吹奏楽部）

基調講演（左：筆者と梯郁太郎理事長）

基調講演は、ローランドの創始者でローランド芸術振興財団の梯郁太郎理事長のインタビューによる録画出演。一見電子楽器とは関係の薄いとみられがちなクラシック音楽やライブ演奏の重要性を語り、電子楽器製造者というよりも創造者の情熱を伝え、電子楽器関係者にハードを考え直させるものであった。重ね重ね本人の講演が望まれた。

パネルディスカッションは、「電子オルガンの専門教育のあり方」というテーマで、パネリスト、森垣桂一（国立音大）、宮本賢二朗（浜松学芸高校）、西岡奈津子（平成音大）の現場に基づいた発言に続き質疑応答があった。パネリストが各自の実績に基づく発言は説得力があり、このテーマに深く切り込むことができた。もっともテーマが大きいので、次回は専門教育の中の具体的項目でのディスカッションが望まれるのではなかろうか。

パネルディスカッション会場

事例発表では、ML（ミュージックラボラトリー　電子ピアノなどを用いたグループレッスン）の新しい試みが 2 事例紹介された。最初は脇山純（平成音大）が、クラス授業の中での「音の

見える化」、二つ目は、三谷　温／森　篤史／諸井野ぞ美の３人がML用のテキストの開発、というテーマで現状報告と実習を行い教育現場での先端的事例が発表された。

研究発表の司会をする西山淑子音舞会会員

研究発表は９名が、「NHKとエレクトーン」「韓国室内オペラ団と電子オルガン」「シニア向けキーボード講座」「電子オルガン普及と講師研修」「電子オルガンとアコースティック楽器のコラボ作品」「電子楽器を用いた介護予防活動」「古楽と電子楽器」、「ヘングレにみるハイブリッド・オーケストラ」「携帯電話を利用したピアノ学習」のテーマで発表を行った。タイトルの紹介しかできないが、この学会ならではの多様性がみられる。

研究コンサートは、「ハイブリッド・オーケストラによる歌曲とオーケストラの試み」というテーマで次の曲が演奏された。

ベートーヴェン　「エグモント」序曲、「コリオラン」序曲
グリーグ　歌曲「過ぎし春」「君を愛す」
ワーグナー　「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」

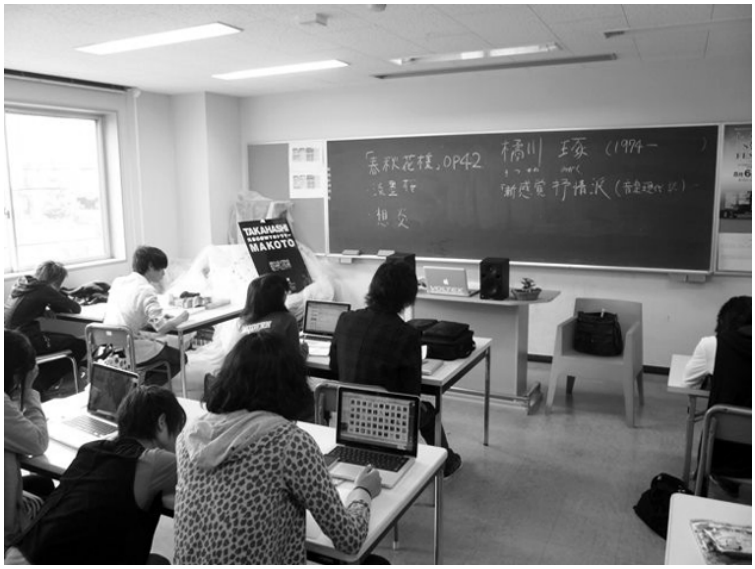
ハイブリッド・オーケストラ（通常のオケの弦楽器の所に電子キーボードを配置）

コンサートは、指揮（小川正明、村尾謙治、小塚祐輝、羽生田知佳）、歌手（西義一教授、バリトン）、弦楽器（音楽専修４年生８名による電子キーボード）、管打楽器（吹奏楽部有志）で、柳田孝義教授の解説の下で行われた。電子楽器とアコースティック楽器の音量バランス、電子キーボードのオルガンタッチやエクスプレッションペダルの不慣れなどの問題点も見受けられた。しかし、通常ピアノしか経験していない音楽専修の学生がスコアを見てアンサンブルの経験ができたこと、また吹奏楽のレパートリーしか演奏できない吹奏楽団がハイブリッド・オーケストラの演奏形態でオーケストラ作品を演奏する試みは吹奏楽の分野にとっても興味深い試みではなかろうか。

（あがた・しゅん　本会研究会員）

福島日記（15）　　作曲　小西 徹郎

ここのところのメジャーアーティストによる特別講演をはじめ、自身の今のアートにおける環境の中でたくさんの気付きがあった。学校では多くの時間を理論や実習、制作、基礎、たくさんのことを学ぶ。それはやはりとても大切であり、とても堅苦しいものである。私自身も理論やアレンジやソルフェージュにも関わっていてその堅苦しさを維持しなければならない時間もある。だが、学生をみていてそこに大きな疑問を感じている。学生は作曲をして演奏もしているのだがその「創造的根拠」は非常に乏しいのだ。「上手く」できているのだがたくさんのことが圧倒的に足りないのだ。



授 業 風 景

私はここ最近、技術や理論から離れるようにしている。何故なら離れた場所にこそ真髄があるからだ。音楽やアートは「人」そのものであり、「心」そのものだ。これはどんなに尖がったアートにおいてもいえることだ。ということは作品云々よりも人間性を育てることが最も重要だ。たとえば、プロとしてのスタンス、マインド。常にそのスタンスは表現や作品に表れる。行為行動から表れるのだ。そのことをできるだけ講義の中に組み込んでいるのだ。そして「個性」を大事にすることも伝えている。クラシックやジャズでは個性よりも先に身につけなければならないことが多くある。だが、ポピュラーミュージックの世界ではそれがいい音楽を生み出す妨げになっていると感じるのだ。ポピュラーミュージックではおおよその基礎の次にはいきなり個性を求められるのだ。

先日、ソルフェージュの時間を潰して「上を向いて歩こう」の譜面を配布し、譜面どおりに歌った。そしてそのあとに各学生に「この曲をどうやって歌うか？をキーワードを出してイメージしよう」と伝えた。譜面どおりではなく、自分ならどう歌うのか？そしてこの歌を歌うことで何を伝えたいのか？各学生の表現における創造性を試したのだ。すると、学生たちはそれぞれにキーワードを出して伝えたいことを出し、実際に歌った。叫ぶ者、軽やかに歌う者、ラップのように歌う者、即席でキーボードでビートを刻みながら歌う者、いろんな「上を向いて歩こう」が出てきた。普段とても引っ込み思案な学生が今まで見たことがないような表現をしたことが特にうれしかった。こういうことがとても大切なのだと私自身も学んだ。

10 月から同じ専門学校グループの「国際情報工科大学校」のゲームグラフィック科にて DTM を教え始めた。彼らはゲームのキャラクターを描くイラストレーター志望である。音楽はまったく知識がないし音楽を聴くという積み上げもない。（自身の環境ではある）ソフトの使い方をレクチャーしてリズムについて説明、これだけで彼らは初講義の翌週には曲を作っていた。このことは本当に驚きだった。しかもクオリティも高く、そのまま商品にできるレベルだった。だが、中には書けていない学生もいた。理由は「何を作っていいのかわからない」「イメージが湧かない」だった。私はこのときピンときた。書けていない学生と、ミュージック音響科の学生との共通点を感じた。そこで彼らに「何も考えなくていいよ、どんどん PC に触ってどんどん打ち込んで聴きながらどんどん作りなさい」と伝えた。先にイメージがあってそれを具現化することは大事だが、手で触って生まれてくる音楽だってある。何も音楽体験がないのなら子供のように機械に触りながら作っていくしかないだろう。すると彼らは今までが嘘のように曲を書き始めた。そしてクオリティは高い。

ゲームグラフィック科

この新鮮な体験をミュージック音響科でも試してみた。ゲームグラフィック科の学生たちの作品も聴いてもらった。ミュージック音響科の学生は驚き何かに目覚めたようだった。そして今までまったく書けなかった学生が 3 時間の間に 2 曲も制作した。人間はやはり気付きの連続の中で成長していくのだと私は確信した。

音楽やアートをやっていくためにはやはりバランスが重要だ。だからもちろん基礎や理論や技術を磨くことは重要であるが、そこに留まってはいけない。音楽やアートはそこから先が最も重要で今は入門編にすぎない。作品や表現をよいものに、豊かにしてくれるのは偏った技術や理論ではなく、「人」「心」なのである。ここで勘違いしてはならないのは表っ面だけ優しいことを言ったり、甘やかすような人、つまり優柔不断な人ではなく自身のプロとしてのスタンス、明確な線引き、厳しさ、謙虚さ、を持ち「思いやり」のある人間であるということだ。そこを学生に限らず多くの人々に理解してほしいと願う。

そして「鑑賞者の眼」「審美眼」を育てるカリキュラムが非常に大切で少しでも早く導入していかなくてはならない。音楽やアートをみていく力はとても問題であると考える。そしてこのことは専門家のみならず文化を育てるためにも多くの場において必要だろう。

（こにし・てつろう　作曲会員）

″粋美挿画展２０１２″に参加して

作曲　小西 徹郎

ここのところ私は音楽以外の世界にも出入りするようになった。友人の挿絵画家、恩田好子さんのお誘いで日本出版美術家連盟（JPAL）の懇親会や展示に足を運ぶようになった。その中で多くの素晴らしき挿絵画家の先生方に出会い、連盟の理事の星恵美子先生から10月後半から始まる「粋美挿画展２０１２」にて映像と音楽を制作してもらえないだろうか？という相談を受け、私はすぐに快諾した。新しい展示の仕方、映像という手段は今まで出版美術の世界ではなかったことで斬新であると私も感じた。

日本出版美術家連盟（Japan Publication Artist League 略称 JPAL）は挿絵、装画、漫画図説を中心として装丁、デザイン、イラストレーションなど出版美術に関する研究・啓発・振興・発展、および挿絵画家・装画家（イラストレーター）などの社会的役割の発展と地位の向上、および創作者の権利問題の改善に取組むことを目的とするわが国では最も古く設立された職能団体である。日本出版美術家連盟の発足は1948年に「Aの会」や「十五日会」に所属する若手挿絵画家たちが集まり岩田専太郎に挿絵画家の団体創設を訴えたことに始まる。1948年4月団体名を「出版美術家連盟」と命名し発足した。初代理事長は岩田専太郎。発起人メンバーは岩田専太郎、鴨下晁湖、宮尾しげを、田河水泡、田中比左良、小野佐 世男、冨田千秋、川原久仁於、田代光、嶺田弘、清水三重三、細木原青起、寺本忠雄、須藤しげる、梁川剛の15名。（日本出版美術家連盟Webより抜粋転載）

長岡秀星作品

この歴史ある団体の大きな展示である「粋美挿画展」に仕事とはいえ招かれたことはとてもうれしく光栄に思う。手描きの世界、その迫力と説得力、今回の展示は神保町の東京堂書店の東京堂ホールにて10月22日から11月18日の4週にわたり行われた。毎週テーマが変わり展示も変わる、これほどに充実した展示を私は今までみたことがなかった（削除：くらいだ）。第1週は「カー＆トレイン」第2週は「ミリタリー・アート」第3週は「ミステリー＆サスペンス」第4週は「時代小説～新撰組～」第1週ではEW&Fやカーペンターズのジャケット、ゼネラルモーターズ、フォード、クライスラー、フォルクスワーゲン、ロッキード、リーダーズダイジェスト NASA などの仕事を手がけた長岡秀星、鉄道分野での第一人者のイラストレーター細川武志、第2週は戦艦の第一人者の小松崎茂、水野行雄、田宮模型のパッケージで有名な大西將美などのミリタリーアーティスト、第3週と第4週は推理小説、新聞小説など多くを手がけた濱野彰親、笹沢左保著「木枯し紋次郎」などの挿絵を手がけた**堂昌一**、江戸川乱歩の「怪人二十面相」の表紙などで知られる**伊勢田邦貴**、何とも豪華な展示なのである。こ

の充実した展示の中で作品を使用した映像と音楽、この依頼に即座に「やります！」と応えたのはいいのだがどうアプローチをすればよいのか？ここでとても困惑した。

堂昌一作品

あるとき、理事の星先生とお話をしたときに、挿絵の運命、挿絵画家の運命の話をきいた。出版美術における挿絵とは作家の文章を読み想像し魅力溢れる「絵」として文章を飾り掲載されるものであり、巧みな技術や時代考証、優れたデッサン力が要求される、しかしいかに優れた才能や技術を持った先生であっても、大きく名前を語り継がれることもなく、中には個展もせずにこの世を去っていく画家もいる、そして挿絵はそのページを見逃してしまうと二度とその挿絵を観ることはないのだ。視覚として真っ先に眼に飛び込んでくる挿絵、だがその扱いは社会においては丁寧ではないのだ。この話をきいて私は思った「挿絵画家を残す映像作品にしよう！」私はすぐに各画家の作品を送ってもらい、画家のポートレートも送ってもらいどういう順番で作品を並べるべきか？を考えた。ここが一番難しい、そう、私には知識がないのだ、だから勉強をした。そして各作品の背景が異なるままストーリーを組み立てた。そこに合う音楽を作曲、制作した。そして会期前に映像を完成させた。試写会の際には理事の先生方、会員の方々から拍手をいただけてとてもうれしく、光栄に思った。

伊勢田邦貴作品

会期中と前後は可能な限り会場に向かい作品を鑑賞し、搬入搬出にもかかわった。多くの若手や学生にもこの様子は知ってもらいたい。展示の仕方、段取り、等ちょっとした道具の使い方、こういうところにもプロとしてのこだわりがあり、その積み重ねが挿絵画家の仕事を支えているのだ。作品や「仕事」から画家の人生を感じ取って、若手や学生自身が感性や審美眼を高める努力をして育ってほしい、そして素晴らしき作品を歴史に残していくことを地道に行ってほしい、そのように願う。

（こにし・てつろう　本会理事）

深沢亮子　恵藤久美子　安田謙一郎

ピアノと室内楽の夕べ

日本音楽舞踊会議創立 50 周年記念

12 月 4 日（火）午後 7 時開演　音楽の友ホール

主催：日本音楽舞踊会議　後援：月刊『音楽の世界』

実行委員：北條 直彦

《プログラム》

F.Schubert

二つのワルツ　ロ長調／ロ短調

Waltz H-Dur D.145 No.2 / h-moll D.145 No.6

F.Brahms

ピアノとヴァイオリンのためのソナタ　第 1 番ト長調　作品 78

Sonate für Klavier und Violine Nr.1 Op.78

助川 敏弥　Toshiya Sukegawa

“Sunset” チェロとピアノのための（初演）

“Sunset” for solo Violoncello and Piano

W.A.Mozart

ピアノトリオ　第５番　ホ長調　K.542

Trio für Klavier ,Violine und Violoncello Nr.5 E-Dur K.542

深沢 亮子（ピアノ）／恵藤 久美子（ヴァイオリン）／安田 謙一郎（チェロ）

深沢 亮子（ピアノ）

15 歳で日本音楽コンクール首位受賞。ウィーン国立音楽大学に留学し首席で卒業。1961 年ジュネーヴ国際音楽コンクール 1 位なしの 2 位。以来、ムズィークフェライン黄金の間やコンツェルトハウス等で度々オーケストラとの協演を始め、日本、ヨーロッパ、南米、アジアの諸国で精力的に演奏活動を行い、日本の作品も度々紹介している。また、国際音楽コンクールや日本音楽コンクール他の審査員を務める傍らラジオ、TV に出演。数多くの CD、著作、楽譜の出版。一昨年はデビュー55 周年記念リサイタルを春秋東京にて行ない好評を博す。日本音楽舞踊会議代表理事。

恵藤 久美子 （ヴァイオリン）

3歳より母にピアノを、5歳より父にヴァイオリンの手ほどきを受ける。7歳の時、斎藤秀雄氏の薦めにより、ヴァイオリンの道を歩み始める。同時に桐朋学園「子供のための音楽教室」鎌倉分室へ入室する。ヴァイオリンを鷲見三郎、鷲見健彰、海野義雄の各氏に師事。室内楽を黒沼俊夫、斎藤秀雄両氏に師事。第41回日本音楽コンクール第2位入賞。

1972年、兄、堤剛と「二重奏のタベ」を、東京とカナダのオンタリオにて開催。1979年、リサイタルで弘中孝氏と共演。2003年、2004年、2005年、2月深澤亮子氏、安田謙一郎氏とピアノ、ヴァイオリン、チェロのタベを開催。2002年7月には、深澤亮子氏とヴァイオリンとピアノのタベを開催。2004年6月中野洋子氏とデュオコンサートを開催。東京フィル、新日本フィルとメンデルスゾーンの協奏曲、札幌響とシベリウスの協奏曲、山形響とモーツァルトの協奏曲、桐朋学園オーケストラとブルッフの協奏曲を共演。その他アマチュアオーケストラとの共演も数多い。

1975年より約10年間、桐五重奏団のセカンドヴァイオリンとして活躍する。また、1980年より2年間山形交響楽団の客演コンサートマスターとして在籍する。現在、アンサンブル・アルス・ノバ コンサートマスター。桐朋学園大学特任教授。日本音楽舞踊会議会員

安田 謙一郎（チェロ）

1955年斎藤秀雄に師事。1966年第3回チャイコフスキー国際コンクール第3位入賞。ガスパール・カサドに師事。1968年よりピエール・フルニエに師事。1973年以降、ヨーロッパ各地で、リサイタル、コンチェルト、レコーディングなど多方面で活躍、74年小澤征爾指揮サンフランシスコ響と共演。プラード・カザルス、サン・モリッツ、モントルー、グスタード・メニューインなどのフェスティバノレに参加。1986年には安田弦楽四重奏団を結成、クワルテットの活動にも多くの力を注ぎ、80曲におよぶハイドンの弦楽四重奏曲全曲演奏、ベートーヴェン年代順室内楽の演奏会等、意欲的なコンサート活動を続けている。日本音楽舞踊会議会員。

《曲目解説》

シューベルト：12 のワルツより　第２番ロ長調、第６番ロ短調　op.18(D.145)

シューベルトは、折に触れて舞曲を作曲し、ある程度の量がまとまったところで出版を重ねていた。「舞曲集」として出版された曲集は 30 以上にのぼる。ひとつの曲集に 30 曲以上の舞曲が所収されることも珍しくなかったので、その総数は 1000 曲近くになるだろう。１曲は 16 小節から 24 小節程度と短いが、それぞれ優雅で気品あふれる作品である。この作品 18 には、12 のワルツ、17 のレントラー、９つのエコセーズが収められている。1823 年に出版された。

本日は、そのなかからワルツが２曲演奏される。

第２番ロ長調

アッツェンブルッガー・ドイツ舞曲としても知られる。アッツェンブルッガーには、シューベルトの知人の所有地があり、夏になると、友人たちと集まってダンスやコンサートを楽しんだ。夏の休暇中に作曲されたひとつがこの第２番である。第２番は、翌年、他の舞曲集に再度所収されて、２度目の出版がなされた。優しく語りかけてくるような付点の旋律が穏やかに奏される。

第６番ロ短調

付点音符による上行音型が３度繰り返しては下りてくる、という逡巡するようなフレーズが続く。最後にロ長調へ転調し、晴れやかに終結する。

シューベルト：即興曲　変イ長調 D.935-2

シューベルトの晩年 1827 年に作曲された《四つの即興曲》の第２曲。シューベルトは、この即興曲を作曲する以前に、既に同タイトルの《四つの即興曲》を出版していたが、自分の意志で「即興曲」という標題をタイトルにつけたのは、この D.935 が初めてであった。存命中の出版は叶わず、出版されたのは 1839 年である。

「即興曲」は構成に囚われない自由な形式を指すが、その点、この《四つの即興曲》D.935 は例外的な特徴を持つ。それは、４つの即興曲が互いに調構造や曲想など、何らかの関係を持っているということである。R.シューマンは、「この四つの即興曲が一つのソナタとして捉えられるのではないか」と推論したほどであった。

本日演奏される第２番は、シューマンの推論によって考えると「緩徐楽章」に相当する。テンポは、アレグレットというすこし動きを持った設定になっているが、コラール風のポリフォニックな書法は、まさに緩徐楽章と呼びにふさわしい特徴と

いえる。トリオ部では、さざ波のように分散和音が絶えず動いているが、低音部にしっかりと支えられており、安定感がある。

ブラームス：ピアノとヴァイオリンのためのソナタ　第１番ト長調 op. 78

ブラームスは、その生涯にピアノとヴァイオリンのためのソナタを３曲残している。なかでもこの第１番は、「雨の歌」と呼ばれて特に親しまれている作品である。ブラームスの創作活動が最も盛んな時期であった 1879 年に作曲された。その６年前に作曲した《８つの歌曲 Op.59》の第３曲「雨の歌」を、３つの楽章で有機的に関連付けさせている。「雨の歌」はブラームスが生涯思いを寄せた女性であるクララ・シューマンが好んだ作品でもあった。楽譜を見たクララが大変喜んだとも伝えられている。夏を過ごしていたオーストリア南部のペルチャッハで作曲され、同地でヨーゼフ・ヨアヒムのヴァイオリンとブラームスのピアノによって初演された。ヨアヒムはブラームスにとって 30 年来の親友でもある。彼がブラームスの滞在先まで訪問、演奏していたことを考えると、この作品は、ヨアヒムの訪問に合わせて作曲されたともいえる。特に決まった献呈先も目的とした演奏会もなかったことから、私的な楽しみとして作曲された可能性は高い。そこにクララの好きな「雨の歌」のモチーフを使うことにより、一層プライベートな趣の強い作品に仕上がったといえる。全３楽章。

第１楽章　ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロッポ

「雨の歌」のモチーフを用いた第１主題と、伸びやかなニ長調の第２主題とを対比させた後、展開部ではその二つが絡み合って、繊細な感情とほとばしるような高揚感を表現する。

第２楽章　アダージョ

冒頭は、ピアノの独奏によって「雨の歌」の動機が表情豊かに奏でられる。中間部は葬送行進曲風のリズムを特徴とする。

第３楽章　アレグロ・モルト・モデラート

ヴァイオリンが「雨の歌」の主題を歌う。冒頭において、ピアノは伴奏役に徹するが、ヴァイオリンがその後、その伴奏音型を模倣し、掛け合うような形で進行していく。途中、第２主題冒頭でピアノが奏した「雨の歌」の動機をヴァイオリンがリズムを変えて奏し、これらのモチーフを統合させながらフィナーレへと推進していく。

（解説：湯浅玲子）

助川敏弥　“Sunset”　Violoncello と Piano のための

この曲は私の臨死体験の記録である。数年前、私は不思議な夢を見た。西の山並みに陽が落ちて、一点の曇りもない日没後の空がこの世のものと思えない美しさで

高く広がっていた。人影はまったくない。はば広い道路の両側には人家が続いている。しかし灯影はまったくない。絶対的静寂の世界。私はそれがこの世の風景ではないことを知った。そして、私は、そこがどこであるかを知っていた。

Piano のゆたかで深い響きを背景に V′cello が幻想的旋律を歌う。約 4 分から 5 分の曲。作曲は昨年 2011 年の秋であった。深沢亮子、安田謙一郎、お二人の名手に期待し感謝する。

（助川敏弥）

モーツァルト：ピアノトリオ　第５番　K.542　ホ長調

モーツァルト唯一のホ長調で書かれている。そのため、この調性を選んだ理由として「感情豊かな表現をしたかったからではないか」など様々な憶測がなされている。このトリオが作曲された 1788 年、モーツァルトは、同じ編成でその後２曲を続けて完成させた。いずれもプフブルク家の家庭音楽会のために書かれたものである。モーツァルトは、《ドン・ジョバンニ》の初演の６日後にこのピアノトリオを完成させた。そして数日のうちにプフブルクへ音楽会の開催を要望する手紙を書いている。「いつごろ、あなたのお宅でまた小さな音楽会を開きましょうか。私は新しい三重奏曲を１曲書き上げました。」モーツァルトが親しい友人たちとの共演を心待ちにしている様子が窺える。しかしその一方で、モーツァルトは同じ時期にプフブルクに経済的な援助も申し入れており、単なる社交目的とは言い切れない事情があったようだ。

全３楽章。いずれの楽章もピアノのソロが１フレーズを提示して開始され、途中でカデンツァ風の楽節を持つ。社交目的の作品とはいえ、ピアノが主導する形をとり、また高い技巧も求められる。モーツァルト自身がピアノを演奏することを想定して書かれていたのであろう。

第１楽章　アレグロ

和声的に構想された第１主題をピアノが奏し、その後弦楽器群が和声構造をより堅固に支える。詩情豊かな楽章であり、旋律線も優美で半音階的に変化する。

第２楽章　アンダンテ・グラチオーソ

第２楽章はイ長調で、途中にイ短調のエピソードを挟むロンド形式で書かれている。細かく刻まれたピアノによる分散和音の伴奏の上で、ヴァイオリンが主題を変奏していく。

第３楽章　アレグロ

活気にあふれたロンド・フィナーレ。ピアノが提示した主題をヴァイオリンが受け継ぎ、チェロに支えられ時には掛け合いを楽しみながら幕を閉じる。

（解説：湯浅玲子）

時評

政治・経済と音楽生活～総選挙を前にして～

今の若者が政治に無関心なのは平和ボケしているからだなどと評する年配者がいるが、今の世はそれほど安心して不安なく過ごせる世なのであろうか？例えば、音楽をやっている若者たちの生活はどうだろう。年配の音楽家は、「俺たちの若い頃だって音楽で飯を食うのは大変だったよ。今も昔も変わりはないさ」と云うだろうし、大筋はそうかもしれないが、昔は今よりは良い仕事があったような気がする。音大を卒業すると、かなり怪しい腕前の娘でも音楽教室のピアノの先生くらいにはなれたし、教職に就くのも今ほど難関ではなかったような気がする。ところが今はそうではない。ちょっと前のことだが、Ｔ大の文学部を卒業した後、音楽が好きで芸大に入り直し、私立の音大の非常勤講師になった女性が、「私なんか低所得者の典型よ」などと自嘲的に語っていたことを思い出す。Ｔ大の同期生の中には高級官僚の卵（キャリア）や、大企業で高給を取っている者もいることだろう。

特別に売れっ子になった者や、特に恵まれた家に育った者は別として、かなり多くの若い音楽家たちは、音楽だけではなかなか食べて行けないので、生活の糧を得るための仕事もこなさねばならず、音楽活動と生活の板挟みになり悩む。生活が安定するからといって、フルタイマーとして働くと音楽活動が難しくなり、パートだと安定した収入を得るのが難しい。しかし、音楽をやっている若者は、どちらかというと育ちの良い人達が多く、恥ずかしいという気持ちがあるからか、普段はなかなかそういう悩みを他人に語りたがらない。

一方、音楽を楽しむ側はどうか。今は企業も自国だけでなく外国の企業ともコスト競争をして勝たないと生き残れない。従って専任社員の数は可能の限り抑え、一人当たりの労働量を増やそうとする。そういう状況下では、過労死になりそうなほど忙しく、お金はあっても、音楽など楽しむ暇がない。一方、今は、外国に労働力を求めたり、ＩＴ技術が進んで仕事が合理化されたりしている時代なので、国民すべてに 40 時間働いてもらうだけの仕事量はない。過剰労働と失業が同居してしまっているのだ。

そこで、解決策として考えられるのが、仕事量が多すぎる人の仕事の一部を、仕事のない人に分け与える、いわゆるワークシェアリングである。しかし、企業としては能力のない人間や、怠け者に高給を払うわけには行かないし、また、仕事には適性というものもある。従って、それを成功させるには、労使双方から知恵を出し合うことが不可欠となる。また、その制度導入に躊躇する企業を説得し、実現に協力した企業が不利益を被らないようにするためには、適切な行政指導が必要となろう。そうなると、政治家の判断力と決断力、官僚の賢く柔軟な対応力が絶対に必要となる。実現が非常に難しいような気もするが、実はそういう制度を採り入れて、かなり成功している国もある。もしかすると、音楽をする者と、音楽を楽しみたい者の双方にとって、今より、いくらかはましな社会にすることが可能になるかもしれないのだ。選挙戦中はどの政党も、「国民のための政治」と大声で叫び続けるだろう。では、どの政党が本当に、多くの国民、そして音楽をする者と音楽を楽しみたい者が、生活しやすい社会を実現してくれる可能性があるのか。じっくり考えて選挙に行って投票して欲しい。無関心のままでは、先が開けない。　　（日野 啓太郎）

会と会員の情報

ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

12　月

２日(日)　『音楽の世界』座談会収録　15:00～17:00　会事務所

４日(火) 深沢亮子とその仲間による　“ピアノと室内楽のタベ”
出演：　深沢亮子（Pf.）恵藤久美子（Vn.）安田謙一郎（Vc.）
【音楽の友ホール 19：00 開演入場料 4,500 円（会員割引あり）】
（詳細は、本号 42～46P 掲載のプログラム参照）

６日(木) 深沢亮子(Pf.)－共演：後藤泉(Pf.)　日墺協会クリスマス例会
モーツァルト：４手の為のソナタ D-Dur K.381 他
【ホテルオークラ東京別館２階メイプルルーム 18:30　問合せ：日墺協会事務局 TEL 03-3468-1244　(水)10:00～13:00,(木/金) 10:00～16:00】

７日(金) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】

７日(金)声楽部会総会【芝田会員宅 14:30～】

９日(日) 橘川 琢(作曲)- 第 16 回 詩と音楽を歌い 奏でる「トロッタの会」
詩歌曲『死の花』op.40【早稲田奉仕園スコットホール 18：00 開 3,500 円】

14 日(金)　『音楽の世界』編集会議　19:00～　会事務所

15 日(土) 室内楽コンサートーシューマン、ドヴォルザークピアノ５重奏曲
深沢亮子(Pf.) 掛橋佑水、井上静香(Vn.) 中村静香(Va.) 宮坂拡志(Vc.)
主催:（財）藤沢市芸術文化振興財団
【湘南台文化センター市民シアター16：00（予定）問合せ：0466-28-1135】

16 日(日)ピアノ部会総会【新宿タカノ５階 11:00～】

2013 年

1　月

７日(月) 日本音楽舞踊会議　新年会【詳細を 51P に紹介】

12 日(土) 中嶋恒雄(作曲)－ 講演会「音楽と思想－未発表作品の公開－」2012.11.1～2013.1.14 多摩美術大学美術館にて開催中のモノミナヒカル展～佐藤慶二郎の躍動するオブジェ展～のイベント
【問合せ：多摩美術大学美術館　TEL042-357-1251】

20 日(日)　『音楽の世界』編集会議　14:00～　会事務所

25 日(金) 声楽部会公演「2013 年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」
【開演：18：30　料金：2500 円　すみだトリフォニー小ホール】
（詳細は表紙３のチラシ参照）

27 日(日) 深沢亮子(Pf.)－　東金文化会館創立２５周年記念コンサート
ソロと室内楽　共演：中村静香(Va.)、上村文乃（Vc.）
【問合せ：東金文化会館　0475-55-6211】

27 日(日) 原口摩純(Pf.)－　ピティナ北横浜ステップにてトークコンサート
【横浜市青葉公会堂】

2　月

７日(木) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】

11 日(月祝) 日本音楽舞踊会議平成２４年度第５１期定期総会
【新宿文化センター第5 会議室（1 階）13:15-16:45　】

11日(月祝)原口摩純(Pf.)「ランチタイム・コンサート」【名古屋宗次ホール
入場料1000円問合せ・申込み:宗次ホール052265-1715】
12日(火) 深沢亮子(Pf.)－　共演：城代さや香（Va.）
モーツァルト：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ B-Dur K.454
ドビュッシー：ヴァイオリンとピアノの為のソナタ
【新宿住友ビル７Ｆ　朝日カルチャーセンター13:00
問合せ：朝日カルチャーセンター tel 03-3344-1945】
12日(火) 原口摩純(Pf.)－　東洋英和女学院大学「コンサート＆レクチャー」
【10:40～12:10講座費2,500円
問合せ:東洋英和女学院大学045－922-5513】
18日(月) **動き、舞踊、所作と音楽Ⅱ**
【すみだトリフォニー小ホール　出品募集中】

3　月
7日(木) **定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
12日(火) 深沢亮子(Pf.)－　共演：中村静香（Vn.）
シューベルト：ピアノとヴァイオリンの為のソナチネNo2又はNo3
ベートーヴェン：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ No10 G-Dur
【新宿住友ビル７Ｆ　朝日カルチャーセンター 13：00
問合せ：朝日カルチャーセンター03-3344-1945】
28日(木) 深沢亮子(Pf.)－　シューベルト幻想曲（連弾）他共演：草野明子
【19:00ヤマハ銀座コンサートサロン】03－3572－3132（ヤマハ銀座店）

4　月
1日(月) 原口摩純(Pf.) ＆ 石川寛(Vn.)～ソロとデュオのリサイタル～
ブラームス：Pf.とVn.の為のソナタ第１番「雨の歌」他【東京文化会館小ホール19:00開演　一般3,500円 **日本音楽舞踊会議後援】**
5日(金)**ＣＭＤＪフレッシュコンサート２０１３**
～より豊かな音楽の未来をめざして～
【すみだトリフォニー小ホール　18:30開演　2,500円 】《詳細企画中》
8日(月) **定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
20日(土) 深沢亮子(Pf.)－共演：瀬川祥子（Vn）
モーツァルト：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ e-moll K.304
ブラームス：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ No1 G-Dur op78
【新宿住友ビル７階　朝日カルチャーセンター　午後（時間未定）
問合せ：TEL 03-3344-1945】

5　月
23日(木) 深沢亮子(Pf.)－　曲目未定 共演:藤井洋子(Cl.) H.ミュラー(Va.)
【19:00小金井市民交流センター】 問合せ:042‐387-7728（鈴木）

6　月
14日(金) **作曲部会公演【すみだトリフォニーホール小ホール】詳細未定**

7　月
4日(木)**ピアノ部会公演【杉並公会堂小ホール19:00開演】詳細未定**
出演者募集中　問い合わせは実行委員
原口摩純、山下早苗

5 日(金) **声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」（仮称）**
【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定
21 日(日)「翔の会」20 周年記念コンサート　深沢亮子賛助出演
【浜離宮朝日ホール 13:30】
21 日(日) 日本尺八連盟埼玉支部定期演奏会－
高橋雅光作曲：尺八・箏・十七弦による大合奏曲「彩の国の旅路」(初演)
【久喜市民文化会館 14:00 開演　入場料 3,000 円】

9　月
16日(月)深沢亮子―デビュー60周年 連弾と2台のピアノ作品による　　共演：野原みどり、小沢麻由子、五味田恵理子　予定　モーツァルト、ドビュッシー、フォーレの作品
【浜離宮朝日ホール】14:00　問合せ:03－3561－5012（新演奏家協会）
26 日(木) **CMDJ 2013 年オペラコンサート**
【すみだトリフォニー 小ホール】詳細未定

１０月
28 日(月) 様々な音の風景Ｘ～20 世紀以降の音楽とその潮流～
【すみだトリフォニー 小ホール 】詳細未定

１１月
8 日(金)**若い翼による CMDJ コンサート６**
【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定・出演者募集中

****

会員スケジュールの表示について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催（含む、各部会主催）公演予定です。
明朝体文字は会員から寄せられた情報、および、会関係者が企画、参加して居る事業の情報です。
明朝体太文字は運営に関わる会議等の予定です。
明朝体文字の「会員から寄せられた情報」等は原文に従いますが、内容順を変更する場合があります。

正会員・準会員・賛助会員の皆様へ

〇上記スケジュールに記載の本会主催事業には、会員・準会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料または会員割引料金でご入場頂けます。
〇会員の皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。
〇お知らせの際は、①〇月〇日(曜日)②会員名　③催し物(出版物等)名④メインプログラム一曲名、もしくは公演・講演の内容を一つ　⑤【開催場所】、開演時間、入場券価格、等の順番でお書きください。

新年会のご案内

日本音楽舞踊会議は 1962 年 6 月に設立されておりますので。2012 年は、本会にとって創立 50 周年に当たる年でした。この半世紀は、変動の大きな時代でありましたが、本会はこの時代を逞しく生き続け、コンサート、研究会などの活動を精力的に行いながら、機関誌『月刊音楽の世界』を発行し続けてまいりました。そして、2013 年度からは、新たな時代の第一歩を歩み始めることになります。

いまの時代は、我が国だけでなく、世界的にみても政治的混迷と、経済的停滞の中にあり、必ずしも生きやすい時代ではないかもしれません。しかし、そのような時代だからこそ、人々を慰め、勇気づけるためにも、音楽をはじめとする芸術の力が必要なのではないでしょうか。この会がさらに新しい半世紀を生き続け、創立 100 年を迎えられるかどうかは、判りませんが、それを実現する気概をもって、新しい半世紀を歩み始めようではありませんか。

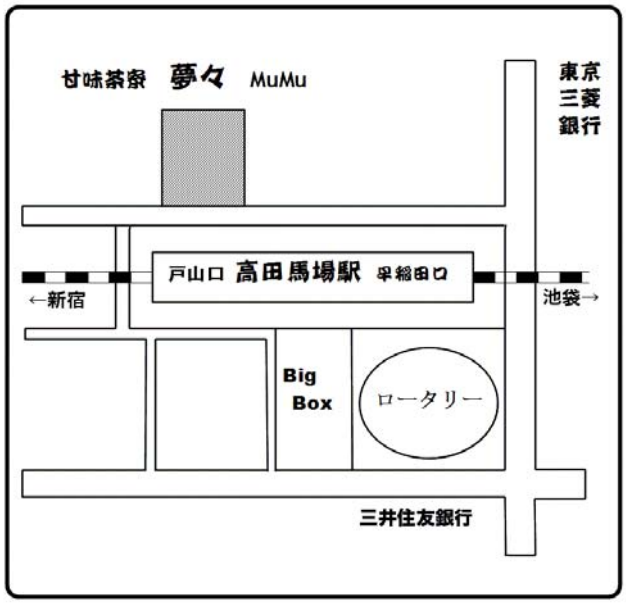
新しい半世紀を、明るく元気に迎えるため、2013 年も例年のごとく、1 月 7 日に甘味茶寮「夢々 MuMu」にて新年会を開催します。古くからの会員はもちろんですが、新しい時代を担う若い人達の参加を期待します。また、会員の方々はもちろんですが、『音楽の世界』の読者の方々なども遠慮なさらずに参加してください。みんなで打ち解けて、分け隔てなく語り合い、そして、飲んで、食べて、歌う楽しい会にしたいと思います。多数の方々の参加を期待します。

代表理事：助川 敏弥、深沢 亮子
理事長：戸引 小夜子／機関誌編集長：中島 洋一（文責）

日本音楽舞踊会議　2013年　新年会

【日時】2013 年 1 月 7 日（月）18:00～20:00
【会場】甘味茶寮「夢々 MuMu」
【会費】５,０００円

会場住所：東京都新宿区高田馬場 4-4-34
電話：03-3368-6166
会場へのアクセス：
JR 高田馬場駅の戸山口を出て　右折。
５０ｍほどの左側です。（地図参照）



編集後記

本会の創立 50 周年の年、2012 年もあと 1 ヶ月足らずで終わります。創立 50 年に当たる最後の月に、『日本音楽舞踊会議の半世紀』という特集を組み、冒頭の論壇は、古くからの会員である代表理事の助川敏弥氏に執筆をお願いしました。氏が最後に投げかけた「このままでいいのか」という問題提起を、我々は重く受け止めなくてはならぬと考えます。12 月 4 日（火）には、最後の 50 周年記念コンサート「ピアノと室内楽の夕べ」が音楽の友ホールにて開催されます。多数の方々のご来場をお待ちします。そして、このコンサートが終わって 1 ヶ月足らずで、新しい年 2013 年を迎えます。年が明けて間もなくの 1 月 7 日には、恒例の新年会が、高田の馬場の甘味茶寮「夢々 MuMu」で開催されます。こちらも多数の方々のご来場をお待ちします。新年を楽しく祝って、未来に向けて新しいスタートを切ろうではありませんか。　（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長：橋川 琢　高橋 通　湯浅玲子
編集部員：新井知子　浦 富美　大久保靖子　栗栖麻衣子　小西徹郎　高島和義　高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦

音楽の世界 12 月号(通巻 544 号)
2012 年 12 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 476 円)
発行人：芙二　三枝子
編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場 4－1－6　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496
HP：http:// cmdj1962.com/　　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp
http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　（アーカイブ）
A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471
購読料　年間：5000 円　（6 ヶ月：2500 円）　振替 00110－4－65140（日本音楽舞踊会議）

＊日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております
＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします